

行つてゐるが、他は大抵家々が集つて生活するドルフ・システムである。ゾルフは普通、小さな村、或は村の小字といったやうなものである。詰り一軒の家でなく、三軒でも五軒でも、一緒に團體をなしてゐる様をいふ。日本の百姓家は、殆んど何處へ行つてもドルフ・システムである。山の中へ行つてもホーフ・システムはなかく見當らない。よほど地形の悪い所、即ち凹凸が甚だしいとか、崖があつたり、谷があつたりして、數軒一緒に成れない所では、已むを得ずやつてゐるけれども、一般はみなドルフ・システムの遺方である。

英吉利人、亞米利加人は、もちろん前者である。英吉利にも村はある。家々が集團つてゐる所も多い。けれども、例へば英吉利人が濠太利に移住したり、亞弗利加に移住したりする時は、どんな家の造り方をしてゐるかといへば、申合せたやうに銘々一人づゝ、ホーフ・システムでやつてゐる。亞米利加もさうである。亞米利加中部の新開地などへ行つてみると、隣家まで何哩といふのもある。今時のやうに、自動車があれば不自由はしないけれども、昔

は頗る不自由なものだつたらう。經營が大農組織であるために、大きな畑を取つて、その真中に家を建て、我が家は我が城郭なり——などといつて、獨りを楽しんでゐる。

けれども、氣の毒なのは女である。男は一日仕事に没頭してゐるから、寂しさを感じないが、女は、東洋でも西洋でも、お喋りの好きなものである。しかし喋りたくても相手がない。井戸端會議などは無論出来ない。その結果、ホーフ・システムをやつてゐる所では、亞米利加においてさへ、婦人の風癪病者が非常に多い。して見れば、アングロサクソン人種は、個性を尊んではゐても、そのみでよく世の中を凌ぎ得るわけには行かない。天性どこかに無理がある。それが婦人の精神作用に現れてゐるのである。

しかし大體においてアングロサクソン、及びチユートン人種は、セルフといふことに重きをおき、セルフ・レスベクトの心持が非常に發達してゐる。これに反し拉丁人種、殊に東洋人種は、所謂コンミュナル、共存性が非常に發達してゐる。随つて、寂しがりやである。一



人でゐることを寂しがる心持は、西洋人より遙に甚だしいのである。

私が北海道にゐた頃、かつて明治の六年頃から、一時盛んに屯田の制度が行はれた。昔支那に行はれた屯田の制度を真似て出来たもので、御維新の後、窮迫した舊士族を救ふのが一つの目的と、もう一つは、廣漠たる土地の開墾にあつた。即ち昔行はれた兵農式で、兵であり、農であつた。普段は、鋤を取つて耕作に従つてゐるが、いざ事があれば、直に鋤を捨て、槍、刀を取るのである。この屯田兵の制度を設けるについて、今の北海道廳の前身である開拓使では、亞米利加人のヘブロンといふ人を、その開拓事業の顧問に招いた。

ヘブロンは亞米利加人であるから、ほんたうの日本の民族といふやうなものとはわからない。そこで、問はれるまゝに自分の考へを述べ、その意見に基いて、何事も行つた。即ち、亞米利加式のホーフ・システムを試みたのである。夫婦に子供が一人二人ある一家族の屯田兵を、或地點に配置すると、そこから一町ばかり離れた所に、また別な一家族のものを配置

し、更に一町ほど離して、別な家族をおくといふやうにした。

その結果はどうであつたか。僅か一町位な距離であるけれども、非常に不便である。もちろん電話などのない時分であるから、隣家と朝夕話も出来ない。話すならテク／＼歩いて行かなければならない。それも雪が降つたり、風が吹けば行かれない。そこで、みんなは寂しく思ひ、だん／＼其處に住むことを嫌ふやうになつた。それで、これではいけない、こんな風にバラ／＼に住むのは、日本の國民性に合はないのだ……といふことがわかつて、それを改良することになつた。今までは、各一定の土地の真中に、家を造つてゐたから、隣と隣までに相當の距離があつたが、それをなるべく縮めたのである。けれどもたくさんのお家を動かすことは、土地の關係からしても出来ない。そこで、せめて數軒づゝでもよい、一緒に集めたいと苦心した末、各々の家を、自分の土地の最も端の部分に造る。其處へ隣りの土地の地主が、矢張りその地所の一番端へ家を造るといふやうにして、三軒なり、四軒なりの家が



集まつた。つまり碁盤目になつてゐる四つの土地の眞中を中心にして、四軒の家がその各々の地境に造られるといふわけである。これがもうすこし發展して、せめて宅地だけは別にして、其處に三十戸なり、五十戸なりの住宅を拵へて、ドルフ・システムの方法でやるならば、幼稚園も出来、學校も出来、神社佛閣なども出来る。小さな部落が生れるのである。それがよからうといふので、それから後の新しい北海道の移住地では、大抵この方針でやつたやうである。確にその方が日本の民族性に適してゐるのである。

### 共存性の長所と短所

かういふ點から考へても、吾々日本人には、どこかコンミュナルな、即ち共存的な性質が多分にある、といふことは確かである。然らば、この性質には、いかなる良き點があり、またいかなる弊害があるか？

先づ、良い點を擧げるならば、行儀作法が確に良くなる。これだけは西洋人に比べて、誇り得るのである。日本の子供に、一番よい言葉は、

『お前、そんなことをすると笑はれるよ。』

といふ一言であらう。これは一番利目がある。西洋の子供にこんなことをいつても、更に効果はない。これは何の故であらう？ コンミュナル・ライフを尊ぶからである、外部のオピニオンを重んずる心の反映である。或外國人は日本の子供を評して、ジャパニーズ・チルドレン・アール・ポーン・シイピライズといった。日本の子供は、生れる時から文明的に生れてゐる、亞米利加の子供は野蠻人であるといふのであるが、面白い言葉である。

日本の子供は、文字通り生れながらにして、シイピライズになつてゐる。文明的に生れてゐる。

その代り、日本の子供には、我は我たり——といふやうな強いところがない。人の顔色を



見て物をする。自分で述べたい説を持つてゐても、まア人の意嚮を見た上で……といふ態度になる。質問したいことがあつても、こんなことを質問したら馬鹿にされやしないかしら……と躊躇する。馬鹿にされやうが、されまいが、自分がわからないのであるから、遠慮なく尋ねたらよいと思ふが、さうは行かない。

第一、自分が分らぬといふその自分といふものを、無視してしまふのであるから、笑はれないやうに、何か一言いふなら褒められることを言ひたい、えらいことを言つて、聴衆を驚かすやうなことをやつて見よう、といふやうに、始終標準が外にある。近頃の心理學者にはせると、吾々は常にエキストロヴァートの傾向を持つてゐる。エキスは外で、物を見るにも、何かするのでも、標準をいつも外に置く。故に、何を行ふにしても、所信を述べるにしても、『百萬人と雖も我往かん。』といふ強さが足らない。百萬人どころではない。十人が左といへば、俺も左へ行かうといつて、極めて雷同されやすい性質である。この點は確に東洋人

の弱いところである。たゞ雷同されるまゝに動くのであるから、強味が足りない。

その代り、またよいこともある。例へば、かの米騒動があつた。またかつてポーツマス條約の後、東京の市民が騒いだ、焼打事件などもあつた。私は、この二度の騒ぎを眼のあたり見たのであるが、米騒動の際など、米屋が不正なことをして怪しからぬ、やつつけろといつて憤慨するものの、眞面目に、ほんたうに憤慨してゐるものは少い。二三人が本氣で憤慨してゐると、後はやれ〜といつて従いて来る。だから米屋に出會したところで、憎い奴だ、殺してしまへ……といふやうなことはない。むしろ危ないよ、氣をつけろ、といふやうなことをいつてゐる。自分の敵を庇つたり、助つたりするのである。焼打でもそれと異るところはない。歌を歌つたり、やれ〜などいつて氣勢を擧げるけれども、滅多に危害を加へることはないのである。

だから、日本のモツブといふものは、西洋のモツブよりよほど質がよい。西洋人にはせ



ると、グッド・ネーチャーといつてゐる。面白半分にする連中が多いからである。たゞ日本のモツプで一番恐いのは、警官のモツプである。良民のモツプは、さほど恐ろしいことはない。つまり己の確信から出る動きでなく、外から来る、お祭り騒ぎをやつてゐるといふやうなものである。それに反して、イントロヴァートの、己に顧みて、かくあらねばならぬといふところから出發したもの、奮ひ起つたものは、それこそ、命を賭けてやるくらゐに眞面目である。随つて、その結果は恐ろしい。かういふ人が、モツプの中に一人でも入つてをれば、大へんである。まして、モツプに入つてゐる人々の悉くがさうであつたならば、危険の度は測り知れないものがあらう。

この事は、私は、宗教にもよく現れてゐるかと思ふ。キリスト教と、日本の神道とを相對比して考へる。無論、私は、キリスト教を西洋の宗教と斷ずるわけではない。けれども、とにかく二千年ものあひだ奉ぜられた宗教であるから、假に西洋の宗教として論ずれば、キリ

スト教の今日の教には、西洋の民族、拉丁及びゲルマニック、希臘の哲學が混つてゐる。そこで、このキリスト教の教といふものは、多くの信者たちが、いろ／＼混ぜ合せたり、貢獻して、今日のやうなものを拵へたのであるか、それとも、キリスト教そのものの教が、民族の性格を今日のやうに變へて行つたものであるか、といへば、私はその兩方であらうと思ふ。とにかくキリスト教といふものは、大へんインデビデュアリステックなところを持つてゐる。個性を重んずる。信仰でも、銘々の魂を救ふといふことに、重きをおいてゐる。

### 東西信仰の相異

一體、近頃宗教を論ずる人は、いつでも二つの立場から論じてゐる。一は個人的宗教、パーソナル・レリジョン、一はソシアル・インステテウト。これはどの宗教を論ずるにしても、さうなくてはなるまいと思ふ。何故ならば、宗教は個人々々の奉ずるものであるが、す



でに社會の一つの制度になつてゐない宗教はない。老莊のやうなものでさへ——あれは宗教でないかも知れぬが、それにしても、一つのインステューションとなつてゐる。神道の如きは、最もその甚だしきものであり、最も進んだものであるといつてもよい。キリスト教も、社會的的制度にはなつてゐるが、しかしそれにしても、なほその上に個性を重んずることは非常なものである。

ところが、神道になると、これががらりと變つて、殆んど個人の信仰はどうでもよいと思はれるまで、コンミュナル・インステューションとして、レーゾンデートルがあるやうに思はれる。分りやすいふと、基督教の人なら、何派に入つてゐやうが、ゐまいが、それは第二次的のことである。教會へ行つて説教を聴かうが、聴くまいが、或は何かの禮式に出席しようがしまいが、それらはみな第二次的なことである。それをもつて、彼はクリスチャンであるとか、ないとかを測る標準にはならない。少くとも現在にはなつてゐない。然らば、何

をもつて信者とするか、といへば、即ちその人がイエス・キリストを信じてゐるか、ゐないかを測る、それが標準である。キリストを信じてさへをれば、クリスチャンである。

然るに、神道になると、自分が伊弉諾、伊弉冉を信じて、或は天昭皇大神を信じて、信仰の對象といふものは、殆んど問はない。誰でもよい。大黒さんを信じやうが、稻荷さんを信仰しようが、何でもよい。信じてゐなくても差支へない。それなら信仰の度を何で測るかといへば、氏神様の祭禮に提灯をつけたか、つけなかつたか、神樂の時にお米を納めたか、納めないか、即ちコンミュナルな営みに與つたかどうか。その町内なら町内、或地方ならば地方の、みんながやる場所の、社交的の企てに與つたか、與らないか。それが一番大切なのである。實際は、個人々々の信仰など、敢て問はないといふくらゐになつてゐる。即ちキリスト教の方は、個人々々の魂の問題であるのに、片方は魂なんかどうでもよい、その部落、その周囲の人達と共に、共存共榮的な生活を營むに便利か、便利でないか、とい



ふことが、主たる問題になる。

以上述べたやうに、家を造るにもホーフ・システムと、ドルフ・システムとの違ひがあると  
同じやうに、宗教においても、個人の信仰を主とするものと、コンミュナル・ライフを主と  
して編出されたものとの區別がある。後者は信仰といふけれども、レジジョンといふもので  
はない。英語でいふと一つのカルトで、大分その意味が違つてゐる。もちろん、かうはいつ  
つても、決して日本人が一から十まで、何もかも自分といふものを無視して、他人の鼻息を  
窺つてゐるといふのではない。

また吾々が習ふ教へを考へても、なるほど朱子學などを聴くものは、とかくコンミュナル  
の方に重きをおいて、道徳を説くのも、忠といへばすべて相手方の君を持ち出して忠君、  
孝といへばすぐその対象たる父とか母が現れる。また女でいへば、貞といふも操といふも、  
みな夫あつての教である。かやうに、その標準がすべて外にある。どうしても、エキストロ

ヴァートならざるを得ないやうな教を受けてゐる。

これに對照して、西洋ではどう教へるかといへば、なるほど君に對するロイヤリティー、親  
に對するフィリアリティーなどいふ字はあるけれども、いづれもそれに重きはおかれぬ。  
フィリアリティーが由つて起り、ロイヤリティーが由つて起るところ、一口にいふラバーであ  
る。自分の心に親をラヴするか、君をラヴするかといふやうなところから出發して、セルフ  
といふものに根柢をおくのであるから、道徳問題に接しても、勢ひイントロヴァートならざ  
るを得ないわけである。

そこで考ふべき問題は、それならば日本には、古來イントロヴァーションの教が全くなか  
つたか、それとも行はれたことがあるかといふ問題に進んで来るが、この點になると、私は  
さういふ教もあつたといひたいのである。日本固有の、純粹の教ではないかも知れないが、  
彼の陽明學の如きは、確にイントロヴァーションを教へてゐると思ふ。良智良能などいふ



ものは、己を顧みて、人が何といはうともひるまない、コンミュナルな關係に重きを置かないで、己の心に中心點をおいたのである。だから世間が何といはうと構はない、俺は俺で好きなことをやるといつた流儀である。陽明學者にとかく謀叛人が出たり、社會を騒がしたりしたのも、そのためである。世間が何といはうが、己の信ずることが正しいのだ、社會を打壊しても、正しいことを行はうといふ。大鹽平八郎などは、その點で陽明學者の泰斗であらう。また西郷隆盛なども、陽明學者としては、頗る深いところまで研究してゐたものではないかと思ふ。己に顧みていさゝかも疚しいところがなければ、一氣に突進んでやる。だから非常に強いところがある。

しかしながらイントロヴァーションも、エキストロヴァーションも、とかく一方に傾きやすい。完全な人間といふものは、その兩方を兼備へて、よろしきを得たものでなければならぬ。中道を歩む、ゴールデン、ミンで、物によつてはエキストロヴァーションで解決するけれ

ども、イントロヴァーションでなければならぬやうな性質のものもあり、更にこの兩方によつて、始めて解決し得る問題もある。そこで、かくの如きことは、エキストロヴァーションで片づけよ、即ち標準を外において定むべしといひ、かくの如きことは、世間を無視しても、自分の心だけで判断して決行せよといふやうなことは、その現れて來る問題の性質によつて、各自が何とか區別してゆかなければならないのである。

### 中心點の置き方

ちよつと話が横道へ外れるが、二重人格のことについて一言したい。吾々の中には常に二つの人格がある。スチブンスンの書いた物に、ジェキル博士とハイドといふのがある。一人の人で、二人の全く別な性質を備へてゐる男が中心になつてゐる。これは單に小説ばかりではない。恐らく諸君の中にもこれを經驗された方があるだらう。私なども始終經驗して苦し



むことがある。

かつて私は伊藤公爵から、次のやうな話を聞いたことがある。どういふ話が緒になつたのか、何を私が尋ねたのかは、大分昔のことでハッキリしないが、とにかく政治論などではなかつた。その時公爵が私に向つて、

『私は、自分といふものについて熟々考へて見ると、父親と母親からまつたく別な、二つの性格を植つけられてゐるやうに考へる。私の父親といふのは、何でもやれ、どこへ行つて瘴れたつて同じだ、行く所まで行け、といふやうな、亂暴な遣方の人であつた。これに反して母親は非常な心配性で、何かあると寝もやらずに細かいことを考へる。これから先はどうなる、そのまた先は……といふやうに考へまはす女であつた。自分は何事をするので、常に心に出て来るのは、この父親と母親の性格である。ハ、今胸の中に働いてゐるのはお母さんの心だな、こんどはお父さんがやつてゐるわいといふやうに、父と母から受継い

だ性格の働きがハッキリわかる。』

といはれたことがある。ちやうど二重人格のやうなもので、銘々の心に、別の人か動いてゐるやうな気が起る。これは誰にもあることで、珍しいことではない。

そこで、個性の尊重の方に移るが、西洋人だからとて、必ずしも自分一人セルフのことばかりやつてゐるかといふに、さうではない。矢張りそこには、いろいろのものが二重的に働いてゐるには違ひない。けれども、さういふ場合に、たとへよい考へが働いてゐるやうが、悪い考へが働いてゐるやうが、自分に強く感動を與へたものをセルフと見て、このセルフなるものに忠實ならんとする心、これを一口にオーネストといふ、正直だといふ。もつと的確にいへば、自分に正直だといふのである。

エキストロヴァートにおいては、これが非常に出来にくい。己に忠實なれ……といふことは、廣くいはれる言葉であるけれども、実際にはいろいろ障りがある。自分はどうしても



かうしたい、かういひたいと考へても、外部の輿論といふものを一渡り見なければならぬ。そこには義理人情といつたやうな障りもある。大體西洋には、日本の義理人情といふ言葉に、シツクリ當嵌る言葉がない。よしあつても、それは全くの直譯で、吾々の口にする義理人情、血の出るやうな思ひをする強い意味の義理人情ではない。逃れるに逃れることの出来ないやうな、一種のパワーではない。日本で義理人情といふことは、銘々の行を制する一つの權威である。これはエキストロヴァートなるが故に、自然さういふ結果になる。だから己に忠だの何のといつても、そればかりでは通らなくなつてゐる。思ふ事をそのまゝ行ふとか、己れに忠實であるとか、オーネストとかいふ心が、次第に弱まつて来る。

ところが西洋では、己といふことが第一に強く来る。随つてオーネステの反對の嘘なる言葉は、誰人も非常に悪いことのやうに思ふのである。日本ではちやうど正反對の氣味がある。嘘といふことを、必ずしもよいとは考へないけれども、大して悪くは思はない。だから

西洋人と日本人の間では、時々飛んでもない間違ひをすることがある。

私の友人で、今相當有名になつて東京にゐる男と、その友達の亞米利加人の話である。

この二人は互ひに名を呼び捨にするくらゐ親しい仲であつた。それが或時、冗談をいつてゐて、亞米利加人に對して、

『それは、お前、冗談だらう。』

といつた。ユー・アール・ジョーキングといへば文句はなかつたのだが、相憎ジョーキングといふ言葉を知らなかつたので、ユー・アール・ライといつた。すると先方は色を變へて憤つた。今までこんなに眞面目に憤つたことのない男であるから、どうしたのかわからない。何か氣に障つたことでもいつたかしらといふので、いろ／＼調べて見た結果、始めて文字の使方に誤りのあつたことがわかつたといふ。

それほど、日本ではライニングといふことが悪く思はれてゐない。何故かといへば、己に忠



實なことをオネステイと解釋するのでなく、外の人々の意向に従ふのが、道德の標準になつてゐるから、例へば自分に叛くやうなことがあつても、大して悪いことにはならない。

自分に叛くといふことは、西洋でいへば、デス・オーネストといふ言葉になる。だから西洋でも、道德の範圍を越えたといふことにはならない。横に出た方面ならば、嘘といふ言葉を用ひても、大して悪いことゝは思はない。いはゆる道德問題などは、己を標準にした道德ではない。だから、例へば政治の問題にしても、政策などゝいふものは、自分のことではない、政策であるから目的は外にある。詰り客觀的なものである。故に政策を標準とする政治などについては、随分ほんたうでないやうなことをいつても、あまり咎めようとしなない。日本ではむろん咎めない。

### 神道は共存的宗教

突然話がストロジの方へ行つたが、日本の宗教の方面について見れば——佛教は純粹の日本ものではない。さうかといつて、神道も眞に日本の純粹の宗教かどうか。これこそは日本に唯一の系統的思想だと思つてゐた神道までも、この頃の説によれば、元はシヤマニズムらしいとの議論が大分喧しいやうである。とにかくこれだけのことは確からしい。即ちシヤマニズムから變化したといふよりは、シヤマニズムと同じやうな、所謂マジック宗教から起つたものであらうといふことは、どうやら信じられるやうになつた。英語のマジックは、普通にいふ魔法であつて、神道が魔法から起つたといへば、いかにも耳障りでならぬけれども、神道のいはゆる儀式の主なるものを見ると、外の民族によく行はれてゐたマジックが、大部分をなしてゐるやうである。雨乞をするにしても、大祓をするにしても、或は清め給へにしる、豊年を祭るにしる、新嘗の祭儀にしる、大概の神道の儀式は、學術的に用ふるマジックなる文字の中に、悉く入るかと思ふ。



然らば、シヤマニズムとは何か。このシヤマニズムといふのは、矢張りマジックを土臺としたものである。たゞ坊さんが出て来て、妙なお呪ひをしたり、へんな聲を出したり、太鼓を叩いたり、鐘を鳴らしたりして、いろ／＼な願をかける有様を見ると、神道とは違ふやうに思ふけれども、その根柢の思想を糺すと、いかにも似てゐるところがある。

その似てゐるところからのみ出發して、神道はシヤマニズムから來たものだといひ得るか、これは問題である。さういへば、ずつと遠い英吉利だの佛蘭西などに行はれたドルイズム、これなどにも大へん似てゐる。どういふところかといへば、矢張りマジックをやることが似てゐる。だから似てゐるからといつて、直に神道がシヤマニズムから來たといふ議論には到達しないと思ふ。

シヤマニズムであれ、ドルイズムであれ、神道であれ、その何れもが、一つの元から起つたものであるか、即ちマジックといふものから起つたものか。或はさうでなく、銘々別なものから起つたものか。その點は確かでないが、進化の仕方はよく似てゐる。詰り似てゐるといふだけで、共通點の多いことは確かである。

私の言ひたい點は、この神道を宗教としても、これは個人的宗教でなく、矢張りコンミユナル・マジックの、それではないかと思はれることである。例へば雨乞をする。これは個人の宗教には殆んど關係がない。この國に雨が降りますやうにといつて、小野小町ではないが雨乞をする。火を焚いて、拜んで、どうすれば雨が降るといふ、一種のマジックである。或は何か汚いことがあると、みそ／＼ぎをする。古事記などを見ると、しば／＼さういふことがある。川へ行つて洗ふ。ピュリフイケーションをして、その水をかぶれば、諸々の罪が消えて清淨になるといふ。一種のマヂックである。また新しい田を植ゑる。豊年であれかしと祈る。それにはかういふお呪ひをすれば虫がつかない、或は霜の害を防ぎ得るといふ。何れもマジックである。かういふやうに考へると、神道の全體は、コンミユナル・マジックとい



ふ言葉の中に、その特徴を盡してゐるやうな氣がするのである。

吾々大和民族の殆んど唯一の、エモーショナル・ライフとでもいふべきものは、神道によつて來るものである。この神道そのものが、果してコンミュナル・カルトであつたならば、前述のセルフなどに重きをおかず、吾々民族はますます／＼エクストロヴァートの方に力を注ぐべきではあるまいか。そしてエクストロヴァートのよいところを發達させると同時に、他面、今まで怠つてゐたイントロヴァートの強味をも、大いに吸收する必要があるのではあるまいか。この點については、近くは陽明學者なり、また遠くは西洋の宗教なり、哲學なり、文學等から、大いに得るところがありはしまいか、といふことを、私は、常々考へてゐるのである。

### 人のために食事する日本人

いつたい日本人はコンミュナルである。一つ間違へば、随分コンミュニステイックになるかも知れない。人によつては、コンミュナルとコンミュニステイックと一緒にしてゐるが、これは大分違つてゐる。日本のはコンミュナルで、コンミュニステイックではない。何故なれば、マルクスだとか、その他共産黨の人々、いはゆる共産主義を主張する人達が、コンミュニズムといふ字に、もう少し外の意味を取入れたならば、或は日本も古くから、コンミュニステイックな國家だといつても差支なからうけれども、しかし今日では、コンミュニステイックといふ字句は、文字以外に歴史だの學説がくつ着いてしまつて、簡単に文字だけで、その意味を解するわけには行かなくなつてゐる。

それがために、文字に拘泥してコンミュニステイックといふ字を、日本の制度にも應用するといふことは、正しくない方法だと思ふ。日本のはコンミュナルといふので、共産といふことではない。何事にも共同的、共存的にやらう、といふことである。よき共存をなすにつ



いては、或物は共有にしないでなすまい、或産業は共産にしないでなすまい、といふことはあらうけれど、産業を悉く國家でやる、何もかも一緒にやる、私有財産は認めない、といふやうな共産主義ではない。

またコンミュナルといふことは、たゞに経済的方面のみを指すのではない。もつと範圍が廣くて、一面社會の構成をも意味し、その及ぼすところは、お互の道德觀念まで變つて来る。もつともコンミュニズムの方でも、近頃は道德觀念まで變へようといふので、彼の露西亞の如きは、小學校を始め大學に至るまで、コンミュニズムの理論及び倫理を教へることになつてゐるさうであるが、まだ今日では、經濟の方面に重きをおいて、他に手が伸ばせない。随つてコンミュニズムに比べては、大した力もないやうである。

ところで、日本に從來行はれてゐるコンミュナルの思想、共存の考へは、道德觀念から眞理の底にまで、滲み渡つてゐるかと思はれるのである。子供に物をいふにも、これがよい、それは悪いことだといつても、なか／＼背かうとしないが、人に笑はれるよ……といふと、悪戯もすぐ止めるのである。それが日本人の特徴である。人に笑はれる、人に排斥されるといふ言葉を、一番恐れる。その一つをもつてしても、いかにコンミュニズムが、日本人の根柢にまで、靈魂にまで、滲みこんでゐるか察せられる。

かういふ思想を持つ結果、とかく日本人の考へはエキストロヴァーションである。何事でも、常に外部々と外に向いて行くのである。例へば食物である。食物ほど個人的なものはない。人の代りに食つてやるわけにも行かず、自分の食事を人に委任することも出来ない。食ふだけではどうしても食はねばならぬ。さういふ食物についても、ひどく外形を重んずる。

かつて大久保利通卿が子供の時分、その家はひどい貧乏士族で、ろくに白い飯も食へなかつた。ちやうど食事時に、近所の遊び仲間が呼びに来て、

『おい、遊びに行かないか。』



と門前で呼立てた。すると飯を食つてゐた彼は、

『飯を食つてゐるから待て。』

といはずに、その時食つてゐた芋か何かの混物を、

『今、芋を食つてゐるから待て。』

と答へた。するとお母さんから、

『芋を食つたなどいふな、飯を食つたといへ。』と叱られた。

これは日本人によくあるやつで、現に吾々でも、物を食つてゐるところへ友達でも來やうものなら、大騒ぎで、お膳を臺所へ隠すやらして、人に見られるのを非常に耻かしく思ふ。しかも卵焼とか、鮭の刺身でも膳に載つてゐれば、大きな顔をして、まア一杯……といふやうなことになる。

西洋でもさうであらう。けれども、日本ほどではない。西洋に長くゐて、しばしくさうい

ふ場合にも出會したけれども、決してあわてはしない。自分の食つてゐるものは、固いソーセージでも、何でもいゝ。俺が食ふのだ、お前に食はすのではない。不味からうが俺はこれより外にない——といった顔つきで、妙に自信があるやうである。日本人はさうはゆかない。何だか、人のために飯を食つてゐるやうな遣方をする。

### 見得や外聞が標準

衣類についてもさうである。なるほど西洋人は恐ろしく派手な着物を着てゐる。見得坊だと思ふ。お婆さんなども赤い着物を着てゐる。日本人から見ると馬鹿げて仕方がない。けれども、彼等の方からいへば、俺の頭髮に赤いのが似合ふ、或は俺の顔色に似合ふから……といふわけで、自分のために衣類を選ぶのである。現に私なども、赤いネクタイをつけたら似合ふよ、と度々いはれたものだが、どうも日本人から見れば、六十の坂を越えて赤いネクタイ



イをする気にはなれない。白くなつた頭に赤いネクタイはよいものだといふ。そのせゐか、原敬といふ人は、よく赤いネクタイをしたものだ。かりに赤いのが似合ふとしても、世間から馬鹿にされる虞がある。人は黒いのがよいといふ。私も黒いネクタイをつけてゐる。黒いのはちよつと學者らしく見えてよい、と人がいふからである。

西洋人は、自分のために好む物をつける。日本人は、人のために好みをいろ／＼に變へる。この二つの相反した現象は、その根柢において面白いところがある。或有名な婦人が私の宅へ來られた。この人はいろ／＼な會の會長などをしてゐる活動家であるが、

『どうも、いろ／＼な會合を催しても、日本の婦人は寄が悪くて困る。』

と言はれる。どうしてかといへば、主な理由は着物である。或者は紋付の着物を來て出た。然るに外の人は縞の着物を着てゐた。あれでは二度と出られないといふ。また或者のいふの聞けば、私が縞の着物を着て行つたのに、何々さんは紋付を着てゐた。あれではこの

次に私は出られない……といふ。そこで二人共出られない。馬鹿げたやうな話であるが、實はこれが最大原因なのである。具體的な、一番ブラックチカルな問題である。

いかにも標準を外においてゐる。己といふものゝデフィニテを顧みない。セルフ・コンフィデンスがない。語り、我は我たりといふ強いところもなければ、己を信ずるところもなければ、更に己の意見を主張する勇氣も持たない。根柢において、やゝ奴隸に近いやうな心持がする。外の人のいふに委せる。世間でかういへばかう、あゝいへばあゝといふ。政治についても、さういふことがあるかと思ふ。選挙の買収はいふまでもない。たとへそれは政治教育のない人達の行爲と見過しても、見過し得ないのは、内閣大臣などの出所進退に、こんな曖昧のあることである。何事でも自分にコンヴィクションがないから、たゞハイ／＼で、大きなことを喋つても、その行を見ると、實に奴隸の精神を持つてゐるとしか思はれない。洵に淺ましい感じがするのである。



次にもう一つ著しい例をあげると、葬式である。かつて或る人が、『羅馬は葬式のために倒れた。』といったが、日本においても、葬式のために倒れるか、と思ふやうなことをしばしばする。あれほど見張りな、無駄なことはないと思ふ。死んだ人を尊敬して、相當な禮をつくすことはよい。外國では棺桶が通ると、それこそこの馬の骨だか知れないものでも、紳士淑女が脱帽して敬禮する。死んだ人は、いはば神になつたのである。その人のために敬禮する。これは非常な美俗である。

近頃は、日本人も目覺めたか、だんく葬式を飾る風が少くなつた。生きてゐる時に何もしないものを、死んでから急に尊敬させようとして、各々家産を傾け、葬式を盛んにしたものである。かくの如きも、外ばかり飾つて、内を省みない結果である。外の風俗習慣においても、とかく自分の力を測らないで、たゞ見得一方に、見得外聞を標準としてやるのが、エキストロヴァーシヨンの弊害である。これがもう少し高するならば、我が國民の經濟といは

ず、風俗といはず、その向上を阻害する大きな理由になると思ふ。

### 依頼心の助長

もう一つ例をいへば、日本の宗教そのものが、非常にエキストロヴァーティックなものである。こゝで日本の宗教といふのは、神道のことである。明治維新の頃に神道が盛んに行はれた。各村に共同職といふものをおいて——いはゞ基督教でいふ牧師、佛教で僧侶といったものである——盛んに神道を鼓吹したものである。私が八つ九つの時、神道熱の極く盛んな頃に遭遇したから、いくぶんその方は心得てもゐるし、私自身では、神道のために少からぬ感化を受けてゐる。その時分、神道の主として教へたところは、『祈らずとも神や守らん』といふことで、神は銘々の心に在るといふのである。陽明學者の中江藤樹だつたか、熊澤蕃山だつたか、



みな人のまゐるやしろに神はなし

人のこゝろに神ぞまします

と詠んだのを憶えてゐるが、明治の初には、その意味における神道を盛んに鼓吹したものである。これならば、吾々も頗る同感である。社に行つて神いますのではない。銘々の心に神は宿つてゐる。これはコンミュナルな教ではない、非常なインデビデュアルである。これで行つたならば、恐ろしく強い個人が出来る。所信は所信であくまで貫く。人のために節を曲げない、眞直な人が出来たはずである。

けれども、この教は長く續かなかつた。またよしその教が今日なほ存してゐても、勢ひを得ないでゐるだらう。今日公認されてゐる神道の宗派は、およそ十三ある。公認されない宗派が五つ六つある。その教へを聴くと、なか／＼我が心にのみ神ましますとは教へない。富士の山が神様だといつて富士を拜むとか、どここの大きな椎の木、或は柳の靈を守ると

か、祈るとかいつて、神なるものを外において神道を説くものが多い。また神道の儀式の行はれるのを見ると、スピリチュアル・エリメント、精神的靈的作用が甚だ少い。殆んど初から終まで、捧物を持つて来て、いろ／＼と神前へ供へ、僅かの間祈禱してそれを下げる。供物を運搬するのに、時間の八九分通りがとられてゐる。詰りリチュアルである。

基督教にもリチュアルはある。けれども、神道はリチュアルに重きをおいたゞけに、非常に變つたものがある。そこでこれを宗教といはずに、リチュアルとして見れば、あんなによく發達した、莊嚴な威嚴のあるものは、他にないと思はれる。しかしながら、これを宗教として見る時は、實に奇怪な、マジックに毛の生えたやうなものだと思ふ。リチュアルにはアートの分子が含まれてゐる。さすがに日本人は、天性美術趣味の深い民族と見えて、宗教にまで靈的分子をエリミネートして、殆んど純然たるリチュアルにしてしまつたものかと思はれる。



コンミュナルなるが故に、獨立心が乏しい。獨立心の乏しい結果は、依頼心が多い、といふことになる。そこで一方に家族制度の發達を見た。これは自然の行がよりである。お互に倚りかゝつてゐるのである。誰か俺を育てるだらう、助けてくれるだらうといふ。そこで係累、親族などいふものが、重要な役割を持つことになる。家族の中に少し力のあるものがあると、その人が悉くの家族を養はなければならぬ。元來これは支那から來た教だといふが、何も支那から學ばずとも、日本人固有の道德觀念である。道德觀念といふよりも、むしろ社會的觀念であらうと思はれる。

これも美德といへば美德だけでも、また一方には、それに伴ふ不利益も少くない。といふのは、依頼心を起して、懶惰になる。個人一個のパーソナル・レスポンシビリティといふことがなくなる。私は悉くコンミュナルが悪いといふのではない。兩方をバランスして述べるのである。よいこともあるが、これだけをもつて絶對的美俗だとは思はれない。

或人の言に、日本には貧乏人が割合に少い。西洋に比べて少いのは、かういふ制度の結果ではないかといつた。なるほどさうもいへるであらう。西洋ならば、落ぶれても親族知己などがあまり世話をして呉れない。その結果養老院などへ入つて、公の世話になるものが非常に多い。そこで貧民が大へん多いやうに目立つて見へるのである。

その代り日本では、ファミリーの犠牲になつて、伸びるべき青年がどのくらゐ伸びないでしまふかわからない。もう少し學問すれば、何とか目鼻のつく人でも、係累のため、手も足も出せないで終る人がたくさんある。これを差引勘定したならどうであらう。考へさせられるいろ／＼なものがある。

### 感情の激し易い民族

個人の獨立といふことについては、前述の通り、一向行はれずに来てゐるが、一國の獨立



といふ點になると、ガラリと變つて強くなる。強くなるはずである。これは個人の獨立とは、全く違つたところから出發してゐるからである。即ち考へ方が違つてゐる。コミュニナルであるから、一國の獨立といふ問題になると、個人といふものを全く忘却して、何もかも捧げてやらうといふことになる。

以上を總括していふと、日本人の道德觀念は、コミュニナル道德觀念である。故に忠或は愛國といふやうな、全體に亘つたことについては、非常に強い。これが古來からの習慣であると云へば、盲目的に服従してしまふ。世のならはしだと思へば、善たると惡たるとを問はず、そのまゝにやつて行かうとする。社會の改良などはしない。何でもそのまゝアクセプトしてしまふ。

どこの國民でも、何か國に大事のある場合には、愛國心はすぐ盲目になりやすい。是非曲直の判斷なしに、ライト・オア・ロング・マイ・カンツリーといふ感情の起るのは、外國も日本もあまり變りはないかも知れない。が、しかし、外國に於いては、それは事有る時の話である。日本人は日頃でもこの感情が強い。時によると、これが非常な過ちを招くこともあると思ふ。

その心持といふものは、必ずしも正しいわけではないから、日頃冷靜な態度で、國の權利、利益を考へてゐなければ、事に當つてよき判斷を誤りやすいといふことだけは、始終心に止めておかなければならない。

事のすんだ後で馬鹿をみても、後悔してもしやうがない。これは日本にも從來澤山な實例があり、また日本ばかりでは無く、どこの國にもあることであるが、殊に感じの激しく來やすい民族、コミュニナルな、傾向のある民族は、一層この點について、冷靜になれるやう、日頃から考へを養つて置かなければなるまいと思ふ。

西洋人はインデビデュアリステツクで、日本人はコミュニナルである。西洋でも、民族に



よつてインデビデユアリズムの程度が違ひ、佛蘭西人及び拉丁人種はそれが少い。インデビデユアリズムの一番旺盛なのは北方人、英吉利人及びノルデック人種である。これに反して拉丁系統のものは少く、やゝコンミュナルなところも大分ある。しかし日本人に比べれば、よほどインデビデユアリズムが強い。

そこで、はたして何方がよいかといふ問題になるが、これは一朝一夕に片づけられるものではない。一方に變むべきところばかりあつて、一方に非難すべきことばかりといふのではない。両方に利害得失はある。完全な人間にならうとするには、すべてこの両方の長所を採らなくてはなるまい。然らばコンミュナルの方にどういふ長いところがあり、またどういふ短いところがあるかを、お話ししなければならぬことになる。

### 維持したい美德

よい方はむろんそのままにしておきたい。親を思ひ、子を思ひ、親族縁者を思ふ心、これが延て愛國心になり、普通にいふポライテー、禮儀正しいことになり、言語を慎むことになる。人の風俗は西洋人ほどガサツでなく、行儀作法も行届く。かういつたやうなことは、勿論吾々も美德として長く維持したいところである。が、その反對の弱點も甚だ少くない。その二三をいふと、とかく何事も外部によつて判断し、自分といふものを忘れ勝になる。随つて風俗、甚だしきは宗教に至るまで、自分の心に顧みない。何事も世の中の機嫌を窺つて處置しようといふ卑劣な態度が現れる。

また一個人のするところを見れば、依頼心が強くて、獨立心が乏しい。これは日本人ばかりでなく、支那人にもいへる。セーリング・ワン・セース、人の顔を救ふといふのである。日本でいふ人の顔を立てることである。まア俺の顔を立ててくれ……といふ。いかに不體裁なことをしても、世間の前に顔を立ててくれろといふ。これは西洋人には珍しい。ないこと



はないが、滅多にない。およそ日本にあることで、西洋にないといふことはなく、西洋にあることで日本にないこともない。けれども、程度が大へん違ふ。世間の人の見やうが違ふ。セーリング・ワン・セースなどは、西洋にもある。小説を見ても、芝居を見ても、同じやうなどがあるわいと感ずることはあるが、その行はれる廣さが違ふ。それから、それに重きをおく度合が違ふ。

私は政治のことは知らないが、新聞で見ると、何某といふ人は、國家社會のために甚だ不徳なことをしたといふ。けれどもこの人の顔を立てゝやる。さうなるとフオアシブルな道理をくつつけて、悪いものを悪くないやうに、一種の詭辯をもつて、黒いものを白いやうにいひくるめてやる。どこから見ても、黒いものは黒いけれども、さう黒いのではないぞ、吾々近所のもはよく見たけれども、さう黒いのではない……などといつて證明し、その人の顔を立てる。西洋に見られないほどに、支那や日本ではこれが行はれてゐる。だから、外國人

から見ると、嘘で暮してゐるといふ。極端な言葉のやうに聞えるけれども、偽りをそのまゝアクセプトしない。偽りに何か艶をつけて、ほんたうの如く見せかける。所謂自らを欺いてゐる。セルフ・デイスペクションをやつてゐるのである。

可哀さうだ、一人一人は殺せない、命を繋ぐために顔を立てゝやらうといふ。それにも美しい心は認められないでもない。しかし、これは個人を助けるために、コミュニティーを欺くことになる。故にほんたうは、コミュニナルな國民にあるべきことではない。コミュニナルに矛盾する。何故か？ コミュニナルとは、いはゞ社會全體の利福を圖る、それが本則である。ところが社會や國民を欺いても、個人の利益或は個人の名譽を立てようといふのであるから、コミュニナルの本質に全然反してゐるのである。

これはどういふところから起るかといへば、コミュニナルの弱點を養成するから起るのである。コミュニナルの弱點とは何かといへば、自分といふことの確信が弱い。よし假に人が



悪いことをした、犯罪的行爲をした悪い奴である、國家のために毒を流した奴だとよくわか  
つてゐても、いよ／＼となると、あくまでもやツつけるといふ勇氣を缺く。詰りコンヴィク  
ションが弱い。コンミュナルなために弱い。だから、初はいけない／＼と排斥してゐても、  
まアさういはずに……といはれれば、すぐにペタ／＼する。あの人だけはと思つたものが一  
人もなくなる。しかしその人からいへば、これが得なのである。どうも感心だ、人情深いと  
いひ、或は涙もろいなどいふ。

けれどもこれは社會全體として、實に怪しからぬ話である。一人の人のために、六千萬人  
が欺かれたやうなものである。コンミュナルとは、一見矛盾するやうだが、コンミュナルの  
結果である。しかもその弱い方を實行して、コンミュナルの眞の目的である、社會の利益を  
無視することにもなる。

それを思ふと、むしろインデビデュアルのジャジメントによつて、悪はあくまで悪とし、

國家のため社會のために、毒を流すやうな輩は、顔を立てるなどはしないで、葬り去るとい  
ふことが、大いに必要ではないかと思ふ。そこが一番吾々の缺點である。

西洋人と日本人の考へ方の非常に違ふところである。圓い物を四角といつて、その場さへ  
すめばよいといふ。なるほど健忘症の國民を相手にするのでは、それでよいかも知れない。

しかしこれは純然たる瞞着である。この瞞着に安んじて、悪いことではない、一種の方便で  
あるとしてゐるのは、抑々何故であらうかといふと、日本人の物の考へ方が、多く主觀的、  
サブジエクティブであるからである。直感的に物を判断するから起る過ちであると思ふ。

西洋人は、むしろ同じ過をするであらうが、一般にその考へ方はオブジエクティブであ  
る。直感的でなく、物をサイアンテフィックに見る。サイアンテフィックといふ字が、あま  
り良すぎるか知らぬが、要するにオブジエクティブである。物その物をその通り見るといふ  
ことである。それについても無論數多の弱點がある。互ひに善い悪いといふことをこゝで述



べるのではないが、考へ方の違ひは、そこにある。

だから、日本人は繪を描いても、その通りにはかかない。寫生をしようとしても、西洋人ならばオブジェクティブに描かうと思ふから、カンヴァスと物とに眼を瞠つて、セツセと寫し取る。けれども一方では、繪といふものゝ目的が、物その物通りをイミテイトして描かうとするならば、むしろ寫真に任せる方がよい、その通りに出るではないかといふ。これが概して日本人の考へ方である。しかし日本人にしても、徳利を描けといふのに、俺は主觀的だからといつて鍋を描いたり、鐵瓶を描いたり、しはしない。徳利はやはり徳利として描かなければならぬ。

たゞ物の見方が違ふ。描く前にじつと目をつぶつて見る。更にまた目をつぶつてよく見る。あゝなるほど〜といつて、頭の中に描いて行く。徳利が頭の中で形造られて、だんだん繪になりつゝある。かうして出來上るのである。徳利から手を通して、すぐに紙に寫るの

ではない。一度頭の中へ入つて、それが手を通して寫る。詰り一廻りするのである。どうしてもこれは、サブジェクティブなところがある。

さて、大體を約めていふと、西洋人の物の考へ方は、あまりにやり過るとまで思はれるほど、オブジェクティブなところが多い。故に西洋人の考へにはハッキリしたところがあつて、ポヤツとしたところがない。言葉の遣ひ方でも、よほど日本人よりハッキリしてゐる。日本人のいふことは、ちよつとしたことでも、どこかポヤツとして、もやしてあるところがある。繪を見てもさうである。或人は、

『日本の空氣は濕ツぽいから、どことなく物がぼんやりしてハッキリわからない。所謂日本の美なところも、そこから起るのであらう。』

といふ。私もそんな氣がする。ハッキリしないところに餘裕があるやうな氣がする。この態度が吾々に詩を教へる。或は美術、和歌、殊に、俳句などゝいふものを養成して來た原因



である。

西洋人は、はつきり、オブジェクティブであるがためにサイアンテフィックになつた。これが因になつて、今日のデモクラシーが生れた。今日のサイエンス、十九世紀のサイエンスなしに、デモクラシーの起り得ることはないと思ふ。

日本のは、サブジェクティブであるがために、美術的になり、しかもそれがために、デモクラシーにはなり得ない。むしろアリストクラテックである。何故なれば、美術といふものは、私はデモクラテックなものとは思はれない。であるから、サイエンスについての特徴と、弱點と、美術についての長所と短所と、デモクラシーについての善い所と悪い所、それからアリストクラテックの思想と、いはゆる武士道の好ましき所と好まじからざる所、それらが相對照して考へらるべきではないかと思ふ。

### 西洋人は何故理性的か

西洋人と東洋人とを較べると、概して西洋人は理性に富んでゐる。東洋人は、理性よりも、むしろ直観的な心的能力を持つてゐる。このことはよく人のいふことであるが、この差あるがために、東西文明の性質並に社會的政治的思想に、著しき影響を及ぼしてゐるものだと思ふ。

西洋人が理性に富むといふのは、英語でいふとラショナルリティー（合理）に富んでゐることである。合理的といへばその反對は不合理、理性に富む反對は馬鹿とか白痴といふ順序になる。けれどもこの場合は、西洋人が理性に富み、その反對の東洋人は白痴だといふのでは無論なく、また論理上缺點があるといふのでもない。私のラショナルリティーといふのは、インテュイション、直覺的、直観的といふ言葉に對して用ふる言葉である。



そこで西洋人が理性に富むといふのは、果して民族の性格であるか、或は習性となつて出来上つたものであらうか。それは何ともいひ兼ねるが、人智の開発されない時代においては、生活状態が恵まれてゐないと、いろ／＼な工夫をしなければならぬものである。歐羅巴人は自然の恵みに富んでゐない所で、社会的生活を始めたやうである。假に彼等が普通に信じられてゐるやうに、ヒンドクーンに起つたとしても、ヒンドクーンは物産が豊富だとか、氣候のよい所ではない。氣候は寒い方であるから、何よりも先づ着物を拵へることを考へねばならない。自然の食物の恵みがないから、耕作の法も考へなければならぬ。従つて彼等は祖先傳來なかく／＼苦心した民族だと思はれる。かくて物事につけて理性を發揮し、いろいろ物を考へる力を養つたものであらうと思ふ。

更にまた別の學説によれば、歐羅巴人が社會生活を始めたのはすつと北方で、一説にはスカンチナピヤの方だともいふ。スカンチナピヤも二萬年前の氣候は、大分今日より暖かだつたといふが、それでも決して自然の恵み豊かな所ではなかつた。そんな關係上インドユーロピアン、或はアングロサクソンの元が何處であつても、あまり資源に富める所でなく、従つて先づ食物の不足した所に始めて社會を營んだのである。

そこで第一に、どうして着よう、どうして食はう、といふことを考へねばならない。一人でゐるにしても、或はドルフ・システムで生活を營むにしても、樂をしては過せない。むしろ多勢をれば、それだけ各自の割合が少くなるから、天然に恵まれぬのみでなく、更にその僅な天然の恩恵に對して多勢が競争し、同志討をすることになる。従つてこんどはいかにすれば敵を倒せるか、敵の襲來を防げるかといふことを考へる。そこで自然に對し、人間に對し、聊かも油斷が出来ず、常に思索する力を養はなければならぬ。一口にいふと、西洋人は人種として世に現れた最初から、考へを促すやうな状態におかれたことは確からしい。



## 西洋文明の源は希臘

今日の歐羅巴の文明が、希臘にその根を受けてゐるとは、誰もいふことである。けれども、希臘の榮えたのは、どんなに長く計算しても、三百年にはならない。歴史から見れば短いものである。もつとも徳川時代にしても、三百年といへば相當出來事もあつたらうが、よいものは僅かに元祿時代に限られてゐる。限るといつては誤弊があるが、先づその時代が最も盛大であつた。希臘文化の代表といはれる人々をあげると、プラトーン、ソクラテス、アリストテレス、ユリピリス等、ほんの僅かである。大體三十年が一番盛りである。その三十年のあひだに出來た産物を歐羅巴全體が引受けて、所謂歐羅巴文化の基としたものである。歐羅巴人が理窟ツぽく、ラシヨナリティーをいふ癖をつけたのは、確に希臘の賜である。

さて、希臘があんなに擢んで偉大さを示したのは、何が原因したものであらうか。或歴

史家の言によれば、元希臘の土地にゐた民族は所謂ペラシジア民族で、大して才能のあつた民族ではない。ところがそこへアキアンといふ民族が移つてから、急に希臘が勃興した。アキアンといふのは北方民族で、今日いふノルデックであるといふ。よくあることで、北方に飢饉があつたとか、大不作であつたとかいふために、北方を去つて南方へやつて來た。ちやうど希臘の地へさしかゝつたところが、氣候が非常に暖かい。今までは寒ければ藁を着たり、猛獸と戦つて皮を剥いたり、弱いものをどん／＼倒して強いものばかりが残つた。それが希臘へ入つて、希臘の暖かい氣候のために刺激され、いはゞ一パイ機嫌になつた。そしてそれらが大いに活動した結果、即ち希臘文化の基となつたものだといふ説である。

まだ希臘古代の民族別の研究が十分でないから、無論ハッキリはいへないけれども、とにかくアキアン族が非常に活動した。いろ／＼小さな民族がたくさんゐたが、そのうち一番エネルギーの強いアキアン族が主となつて、一種の政治的團體を形造つた。しかもそれは政治の



みでなく、彼等の頭は非常に活潑で、口も八丁手も八丁、美術的才能もあり、趣味も多いといふ、先づ優等な民族であつた。これだけの事實は後の歴史が證明してゐる。

歐羅巴人は、多分に希臘の影響を受けてゐる。一時希臘の文化が歐羅巴に入ることは止つたけれども、キリスト教なるものが傳播するに従つて、希臘の文化がキリスト教の中に包まれ、知らず識らずのうちに入つて來た。キリスト教だと思つて、歐羅巴人が希臘思想を學んだやうなものである。キリスト教といふものは、吾々東洋人が見ると、何だか異人臭い、バタ臭い感じのするのは何故かといふと、東に來ないで、西の方に行つたからである。元は希臘の理窟を借りて、羅馬のインステチューションの下に養はれたから、純粹であつたキリスト教は形が變り、或點においては根柢まで變つてしまつたのである。

### 東洋人の鋭い知覺力

かくて西洋のラシヨナリテゐといふものは、人種的の理由もあるが、その他なほ希臘のトレーニングを受けてなつたらしい。人種を形造る當時から、民族となつて世に現れる時分から、生活状態において已むを得ず理性を養ふやうになつたが、その後、希臘式の思索、思想の方法を學んだために、ますます理性が進んだのである。

これに反して東洋人は、物を見るに直觀的である。例へばコップを見れば、西洋人も日本人も、共に圓いといふ。が、この圓いといふ結論に來るには、西洋人はコンパスで見て圓いといひ、東洋人は一目して圓いといふ。結論に差はないが、詰り東洋人は知覺が早い。大雑把に東洋人といつても、この點にかけては、恐らく印度人が一番發達してゐるらしく、次が日本人、支那人といふ順序であらう。

ちやうど五六十年前、日本の繪畫が西洋に輸出され始めた當時、西洋人は日本の繪畫を見て、野蠻種族のものとなし、鯉の瀧上りの繪を見ては、鯉が水を跳ねて飛ぶのに、こんな



體を曲げることはない、抑々魚の筋肉は……といふやうに合理的の點から説きはしめる。また鳥が飛ぶのでも、翼の恰好が違ふといつて、推理一式で説かうとした。そして長らく日本の繪畫を下等視し、日本人もまた自分の物を卑下してゐたが、今から三十五年ばかり前、早取寫眞が發明され、飛べる鳥を撮り、躍れる魚を撮つて見て、驚いた。即ち日本畫家の描いた繪が、實物の動作に違はないことがわかり、筋肉の解剖などでは説けなくなつてしまつた。そして日本人にはどうしてこれがわかつたのであらう。飛んだ時は尾がかう捲くとか、脊中がかう曲るとかといふことが、どうして分つたものか、と非常に驚いたのである。

要するに、日本人の知覺の力が恐しく早いといふ證據である。現に、或亞米利加の學校では、どうも日本人の眼の構造がどこか西洋人の眼とは違つてゐる。吾々が見るよりもつと深くか、もつと餘計か、或はもつと早くか、いづれにしても分量的に必ず違ひがあるといふ。しかもこれは眼ばかりではない、耳にもあるといふ。二百年ばかり前、中央亞細亞を

旅行して、モンゴリアを通つた或西洋人の書いた物によると、モンゴリル人種の特徴は非常に耳の早いことだといふ。二三年前、亞米利加へまだ今日の如く多數の白人が移住しない時分に、一人の白人が旅行して、しばしインディアンに接し、最も氣のついたのは耳の鋭いことであつた。ちよつと森の中へ入つても、白人の耳には聞えない鳥の音を聞分け、しかもあの鳥がこれから先何間のどこで鳴いてゐるかといふことを聞分けたといふ。

名優團十郎は、百二十種の鯛の食分けをしたと、或時私は聞いた。ちよつと鯛を食つて、これは内海の産で、神戸から十里位先の鯛だ、これは千葉縣の何處の海でとれたものだといひ當てる。私の友人で、静岡で茶を製造してゐる人がある。この人もまたいろ／＼の茶を十種ばかり茶碗に入れて、ちよつと呑んでは吐き、次を呑んでは吐き、みんな一通り味つて、これは静岡縣何郡何村で去年出來た茶だ、これは何村の字何といふ所で、何月頃取つた茶だといひ、その言が一々適中する。かく味覺における知覺が非常に強いのは、天然に備はるば



かりでなく、練習によつて養はれるのである。佛蘭西人が何十種類の葡萄酒を列べて、これは何處の何葡萄酒で、何年前に出来たものだと、味ひ分けるのと異るところはない。

人間には、五感を鋭くする方法も無論あるが、練習によつて感得したのでなく、天然に五感の鋭い點において、西洋人に比べて日本人は遙かに強い。私が英吉利で出版した「ジャバニーズ・トレース」といふ書物の中には、八九年前ゼネヴァの大學で「日本人の特徴」といふ小題で、日本人は知覺の力が非常に發達してゐると述べた一文を收めておいた。その後、或濠太利の著名な學者コンドリストといふ人が、私に手紙をくれて、

『君の書物に、日本人はパーセプションが非常に鋭いと書いてあつた。私の友人に香港大學で解剖學の講座を持つてゐるものがある。その男は支那人の腦髓を幾十か解剖した結果、特に目立つたのは、腦髓の構造の中にパーセプションの力を支配するところがある。そのパーセプションの箇所が、西洋人の腦髓に比べると非常に發達してゐると友は私に話した。』

私は君の本を読んで、友人の私に告げたことを思出し、その觀察の誤らざりしを慶ぶ。』  
といつたやうな親切な手紙である。私が、東洋人の知覺が西洋人に比べて非常に發達してゐるといふのは、打明けたところ、學術的に何等の證據はない。たゞ私の知覺である。ところが香港の學者は、顯微鏡で見たり、いろいろな機械で測つたりして、合理的に同一の結論に達したのである。

### 直觀は知覺の延長

動物は知覺力を持つてゐるが、推理力は極めて少い。故に悪くいへば、知覺力は動物に近いといつてもよい。ちよつと眼に映るものをバツト見るだけである。その奥まではわからない。ポンヤリ掴むだけで、推理のやうにハッキリした證據を掴み得るとはいひ兼ねる。西洋人は一の理窟を樹て、それに種々な事物を持つて來て概括をする。所謂概念を作る。大



體かういふものだといふことを、いろ／＼な證據をあげて大きな概括をする。この點になると知覺は、その物だけに限り、一般的に概括することが出来ない。證據を掴むことが出来ない。何だか知覺といふものは動物に共通してゐて、概念から較べると、遙に劣等な心的能力のやうに思はれるし、またさういふ場合も必ずある。

この知覺の力をもう一つ延ばすと、それが直覺になるやうである。ちやうど動物の持つてゐる本能と直覺とは、殆んど間髪を容れぬものゝ如くである。しかしその本質は大へんに違ふ。恐らく本能といふものは、自分一身を守るために出来たものであり、直覺といふのは、それ以外の實在に接觸する力であると思ふ。

直覺力は知覺のやうに、物質に當つて、五感で働くのではない。五感以上の働きであつて、殆んど知覺を延したやうな力である。知覺が五感の力をもつて、物質に直面して、物質の何物たるを感ずるやうに、直覺は、物質でない或實在に接觸して、いはゞ

それを掴む、理解する力のやうに思はれる。宗教などは詰りそれである。

明治天皇の御製に、

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけり

この御製に詠まれてある、目に見えぬといふのは、決して物質ではない。またその心に通ふとは、五感で通ふのではない。即ち直覺である。『人の心の誠なりけり』も知覺の延長のやうに思はれる。若しその延長でなければ、それと非常に關係の深いものであつて、直に一方から一方に移ることの出来る、聯絡のある道のやうに思ふ。故に知覺の發達した人は、直覺力もまた伸ばしやすい。故に、西洋人に較べて東洋人は、パツと物の要點を掴む。物質ばかりでなく、直に目に見えない實在の特徴を、簡単に言ひ現し、またその要領を得ることが非常に得意である。孔子の論語は倫理的に、道徳的に、また實際的に洵に立派



な教であるが、組織もなく、また證明にも缺けてゐる。即ちかういふわけだからかうだといふ、所謂三段論法などといふものは、甚だ稀である。理窟で詰寄せて行かずに、かうだから、あゝだからと、パツパといひ現してゐる。推理によらず、たゞ直覺をその儘に言ひ現してゐるのみである。

孟子や老子にしても、また同じであつて、深いといへば、恐らく老子ほど深いものはないだらうと思ふ。孔子の遠く及ばぬやうな句がたくさんある。しかし老子においても、證明といふものは一つもない。たゞインチュイション一式である。實に穿つてゐると思ふ言葉があるが、もう一應再考して見ると、さてどこを穿つたのであるか分らない。「うんさうだ。」いやさうぢやない。「これは圓いのだよ。」いや四角だ。」と、實に平氣でいつてゐる。しかもそのいふことが、一々當つてゐるやうに思ふ。即ち目に見えない實在に觸れてゐるやうな氣がする。これは推理の力で行つたのでなく、矢張り直觀によるのである。

日本人はこの點について、一層さうである。古來多數の偉大な學者も輩出したが、その論ずるところは頗る淡泊なものが多い。日本人で、哲理を論じ得るものは、恐らく佛教の高僧ぐらゐであつたらう。その高僧も、捻くれた學者などを相手にして、理窟を列べて暇を潰すよりは、下女や下男や、死にかけて婆さんなどを救ひ、或は泣ける寡婦の涙を拭ふことに力を盡したのであるから、哲學的な理窟つぽいことはいはなかつた。

これは高僧のみでなく、一體日本の偉人の書いたもので、哲學染みた物はない。日本歴史の如きものは、歴史といふよりは、むしろ確かな事柄を一々擧げたクロニクルのやうなものである。山陽の日本外史などは、美文半分で、いはゞマコーレーの歴史の如きものである。文學にしる、道徳にしる、また歴史に關した事柄にしる、情ないほどに日本人の書いた物には推理の力が現れてゐない。



## 直観は養はれるか

然らば、直観なるものは、吾々が養ふことのできるものか。一體、美術の如きは或程度までは學校で學び得るが、西洋人の特徴たる科學と異つて、むしろ非常に個性によるものである。科學だからとて、誰にでもやれるものでは無論ないが、しかし理窟を土臺とする科學と、直観による宗教または美術とは、學ぶ點において、非常な差がある。科學の方は、謂はば顯微鏡とかその他いろ／＼な道具を用ひ、歴史家、文學家ならば、圖書館に入つて研究に成功し、所謂こゝに博士程度のもものが出來上る。しかし直観で行く人は、彼の坐禪を組む人を見てもわかるが、三年ぐらゐ修業したところで、野狐禪にもなり得ない。三十年ぐらゐやつても、まだ野狐禪のものもある。その代り三十年は愚か、三日もかゝらないでパツと悟る、所謂頓悟する人もある。急にパツと悟を開く、これは恐らく鋭い直観力を持つてゐる人であつて、學んで出來るものか否か、大に疑はしいところもある。

若し、假にインチュイションが學んで出來得るとすれば、恐らくは、遺憾ながらその教へ方がわかつてゐないのではあるまいか。教へ方で一番成功したのは、彼の坐禪の方法位であらう。この坐禪は、足の組み方、手のおき方など、長い經驗から成立ち、何萬といふ人間が、ありとあらゆる經驗と知識を積んで拵へ上げたものであるから、確に偉いものに違ひない。しかしまだあの遺方では、民衆一般に普及出來ない。しかも坐禪を三十年もやつてさへ、やうやく野狐禪に達したか達せぬか分らぬからであるから、況して世の中には、三十年も根氣よくやる人は少い。詰り、これに對する適當な方法がないといつても、決して過言ではあるまいと思ふ。これに反し、推理の方は、その方法が大に進み、また日々新しい方法が発見されつつある。

とにかく科學は、いはゞ方法がよいから、凡俗の人間でもやつてやれるが、直観は一種の



天才でなければ、なか／＼達しない。一方は方法をさへ求め得らるれば、何か新しい物を捜し出し、世の中に貢献することも出来るが、直観の方はそれが殆んど出来ない。人に貢献するどころでなく、自分自身が達し得られないのである。まして自分に発見したことを、他人に譲つといふやうなことは、到底望めない。

### 悟を開いた人

さて、私がかゝることを述べるのは外でもないが、詰り科學の方には、デモクラシーを養ふ資格がちやんと備つてゐる。誰でも出来、またその出来た物を一般社會に傳へることも出来る。聞くものも、かく／＼の理由でかうだといへば、なるほどと頷かざるを得ない。またその應用に至れば、一般誰人にも傳へ得るのである。これに反して直観の方の発見は、人に譲つことが大へんにむづかしい。却つて、悟つた人などを見ると、

『御覽なさい、何だか變な奴が通りますね。』

と、いはれるくらゐである。

昔、或一人の男が牛を見失つてしまつた。そこで牛を捜しに出かけ、何處にゐるだらうかと、彼方此方を捜し歩いて、だん／＼山の方へ登つて行つた。ところが牛の影は更に見えないで、たゞ眞赤に楓が紅葉してゐた。名も知らぬ小鳥が朗かな聲で囀つてゐた。肝腎の牛は依然として見當らない。彼は捜す意思はあつたが、五感の方はその問題からすつかり離れてしまつて、紅葉を見たり、小鳥の聲を聞いたりしてゐた。だん／＼行く中に、牛の足跡があつた。牛の糞があつた。さては此處に牛がゐるのだなといふことに始めて氣がついた。とにかく牛の足跡がある。確にゐるに違ひない。何方を通つたらうかと、足跡を目當に尋ねると、牛の尾が見えた。牛は藪の中に頭を突込んで、頻に何か食つてゐる。そこで、これを引出さうとすると、牛がなか／＼出て來ない。藪の中にだん／＼入つて行くので、その男も牛



に引張られてついで行つた。そのうちに廣い原へ出た。彼は其處に坐つて笛を吹き、ひとり楽しんでゐられるやうになつた。

かくて、牛が自由勝手に使へるやうになつてからは、こんどは自分に牛があるかないか分らなくなつた。最初牛が珍しい時分には、足跡だ、尻尾だ、角だといつてゐたが、さて慣れ切つてしまつて、乗らうと思へば、頭の方からでも、尻の方からでも乗れるやうになると、もう牛などはあつてもなくてもよいといふやうな気分になり、遂に牛に對する自覺がなくなつた。もう一步進めば、自分といふものがなくなる。じつと考へてゐると、紅葉もなければ、小鳥の聲もしない。牛も見えなくなり、自分といふものも、あるかないか分らないといふところまで行く。かうして宇宙は遂に空に等しくなるのである。

さて、それから一步進むと、世の中が四時春のやうになつて、梅の花が咲いてゐる。梅かと思へば、楓が紅葉してゐる。春も秋もなくなつて、宇宙全體森羅萬象が、どれもこれも渾

然と美しいものとなつてしまふ。かうなつた曉には、たゞ人生を樂んで送るかといへば、決してさうではない。先づこの樂しみを知らないものに預たう、分福しようとして、山の中からのそくと出て来る。

そのまた出て來た時の有様といふものは、美しい、恰も御光の射すやうな仙人になつて、俺は悟つたのだといふやうな顔つきをしてゐるかといふと、さうでない。

『おう。』

『お前どうした。』

といつた工合にやつて来る。富者だからといつて、町噂にもしない。貧者だからといつて馬鹿にもしない。みんな平等に、ニコ／＼した顔をして世の中に出て来る。そして魚屋や八百屋などを相手に、平氣で話をする。これがインチュイションで悟に達した人である。さうなつて來て、初めて自分の欣びを人に預つことが出来るのである。



しかしその樂しみを預たれるものは果してこの人を見て、直にこれは偉い人だと見得るかどうか。かくの如き精神的にも、また靈的にも殆んど絶頂に達した人に、凡俗の人々が出會つて、なるほどこれは偉いお方だと思ふかどうか。むしろ、妙な爺だ、氣味の悪い奴だ、と見るのが普通であらう。これをもつて見ても、科學の發明によつて、一般社會を惠む、例へばかの電燈といふものゝ發明で、人類に光明の恩惠を與へたが如きものとは、大へんな相違があるのである。東洋流の預ち方は、いはゆる具眼の士でなければ、到底預つことは出來ない。この故に、科學はだん／＼とデモクラテックになつて來たが、直觀の方は、自然アリストクラテックなものとなつてゐる。これが東洋と西洋との違ひであると、私は思ふ。

### 東西長所の結合

西洋で、デモクラシーの思想が、隆盛に赴いたのは、その源を質せば、希臘時代以來の

推理によるのであつて、これを系統づけて進めて行くと、延いて科學に到達する。即ち科學を研究し、これを利用するの結果、人間が平等に達し得るやうになつた。東洋のインチュイションも、その根本は平等の思想に基くものであるが、いかにせん、これはよほど具眼の人でなければ達し得るものでないから、従つてその一面の作用たる彼のアーチスト、美術家なども、間々出ることにはあつても、これは習つて即座に出来るものでなく、少數の有能の士に止つてしまひ、自然どうしてもアリストクラテックな傾向になる。

近頃、我國でも、デモクラシーが叫ばれてゐるが、このデモクラシーを實行するには、勢ひ、我が國民性に適ふところの方法からして、考へ直さなければならぬ。デモクラシーはかういふものだ、たゞ理窟をいつても、それでは何にもならない。直觀でなくては、實際わからないのである。

老子を讀んでもデモクラシーの思想が入つてをり、釋迦、孔子の教の中にも無論ある。東



洋の思想には、たゞに人間ばかりではなく、草木に至るまでも、等しく平等とするデモクラシーの思想が織込まれてある。たゞ、遺憾ながら、その間に萬人共通な、誰人にもわかる心理的過程がない。心理的過程といふのは、所謂推理である。然るに東洋には、推理の所産である科學がない。詰り直観インチュイションによつて、極く少數の人がバツと悟るところにその特徴があるとはいへ、誰人にも學んで出来ることではない。随つて、この性質がその儘である以上、私は東洋にデモクラシーといふものは實現出来ないものと思ふ。幸ひに今日では、西洋式のいはゆる科學が盛んに擴つて來たから、こゝに初めて我が民族もデモクラシーを享有することが出来るであらうが、我が國民にデモクラシーを望むならば、先づそれに達し得べき方法そのものから考へなければ、到底實現は出来ないと思ふ。

かくいつたからとて、私は東洋固有の直観インチュイションを棄て、科學にのみ走ることに不賛成である。直観といふものが、果して民族的の性格であるならば、それを捨てようと思つても、一

朝一夕に捨て得らるべきものではない。西洋では、科學によつて、何もかも解決しようとして來た。なるほど科學によつていろいろの事はわかる。しかし靈界については全く行詰つた。現に宗教學などにおいても、神も宗教も悉く科學によつて解決せんとして、所謂神學とかフイロソフイといふ學問を起し、宗教そのものまでも科學で解釋せんとして研究を續けてゐる。これも或程度までは出来るかも知れないが、科學で宗教を研究することは、たゞ宗教を傍觀するのみで、とてもその眞髓に達するものではない。故に、理想としては、どこまでも直観に重きをおいて、東洋式に進みたいのである。

近頃、西洋においても、今後は東洋の心的能力を借りなければ、どうしても實在には達し得ない、といつてゐるくらいであつて、この直観は實に大切な民族の寶玉である。これを失はないやうに、常に精神はここに土臺し、しかもその方法は科學をもつてして、前述した牛を求めて牛以上に達した人が、再び世俗を教へるために街頭に立つた場合、單に婆さんや子



供を相手に話をするだけで能事終れりとせず、更に一步を進めて、その精神を土臺として科學を應用すれば、こゝに初めて、西洋と東洋の長所を結合したものが出來上るであらうと思ふのである。これが私の理想である。

## 第五章 日本人としての世界觀

### 東西人の握手

東西の差は、風俗、習慣、民族の性格等にいろ／＼隔りがあるが、その差の起る原因は種々である。その原因の中で、現在わかつてゐるものもあり、また分らないものもある。わかつてゐる原因の一つに氣候の差がある。

部分的には似た所もあるが、大體において西洋と日本の氣候は、非常に違ふ。例へば、英吉利と日本とはそんなに違はないが、亞米利加とは非常な違ひである。英吉利は島國で、亞米利加は大陸である。随つて亞米利加の氣候は、支那の氣候と共通の點がたくさんある。日



本と英吉利の氣候にも、共通の點が多い。もつとも英吉利と日本の似てゐるのは、氣候ばかりではない。大陸に對して形造られてゐる位置がよく似てゐる。即ち第一には、地理的に類似してゐること、氣候については兩方とも濕氣が多い。たゞ英吉利には梅雨がない。氣候の濕つばい影響としては、人々がとかく家に引込む習慣になる。

英吉利人は、堅固な家をつつて、自分の家に入り、あまり外と交際することを好まない。日本人も引込むことは同じであるが、自分の家には引込まないで、他所の家で遊ぶ習慣がある。詰り英吉利人はヒュミリティーの關係から、自分のホームを重んずる氣風を養ふが、日本人は、家ではあるけれどもホームではない。先づ友人の所へ行くとか、待合へ行くとか、藝者屋へ行くとかする。このためにホーム・ライフが養はれるといふよりも、却つてソシアリティーが養はれる結果になる。

さて、人種的の差といふことに付いて、少しく考へを廻らしたのであるが、私一個の考へとしては、これのみで一切が解けるかどうか、怪しいものだと思ふ。地理的でなければ民族的、人種的だといつて、この二つのカテゴリーを設ければ、何事も何方かに入るわけであるが、それは同時に民族的とか、人種的とかいふ區別を立てた上の話である。私のいはんとすることは、民族の成立とか、種族の性質などに關係なく、すべて人類生きたし生けるものには、みんな共通な何物かがあり、レーシアル・キヤラクターなどいはいはれないやうなものが、必ずあらうと思ふのである。

といつて、吾々は日本に生れた以上、日本人の皮を着替へるわけには行かない。私など、國を去つて勉學に出たのは八歳の時であつたが、六十餘歳の今日なほ東北辯が抜けないといふわけで、各々の民族人種には、抜くことの出来ない特徴がある。しかし今後東西相接近するに至つたならば、國家を無視し、民族人種の差を無視する時代が、人類の前に到着することではないかと考へられる。國家の別まで無視して、文字通り世界が打つて一丸となること



は、私が、特に信ずるのでもなければ、また主張するわけでもない。この點は、どうか誤解のないやうに願ひたいのであるが、たと國境の區別も、人種の差もなく、人々が心から手を握り合ふ、それが追々に押し擴まつて、遂には諸方の人々が同じ仲間のやうに親しく交際つて、親密になれるやうな時代が來るであらうと思ふ。

### 環境の身體に及ぼす影響

先に私は、西洋では古くからパースナリテ어의思想が發達し、日本人は昔からこの考へが乏しい、といふことを述べた。こゝに氣候の差について、それがいかなる影響を與へるかといふ問題を討議するに當つても、私は氣候の關係だけで、その地方々々の人間の、根柢的の性格が變るものとは思はれない。無論風俗習慣には、それ〴〵の變化はあらう。太陽の眞向に照る所と、さうでない寒冷な所とは、家の建て方、衣服の着方から違ふ。熱い所のもの

は肌の髓まで黒々と焦ける。けれども、それは全く表面のことである。日光の届かないところ、即ち吾々の心の中までも變ることはあるまい。

かやうに顔の構造、身體の構造は、氣候によつて多少の變化のあることは認められる。脊の高い低いなども、氣候が大いに影響してゐるのである。食物の關係や、平生の暮しやうなど、無論その一部へ入るわけである。同じ日本人でも、東北のものは概して足が短い。西洋人と日本人を比べれば、後者は遙に小さい。足が短いのである。胴の丈は同じだから、坐れば同じ高さになる。一説には、吾々日本人はモンゴル人種だといふ。モンゴル人種は言葉の通りモンゴリヤ人に屬する種族であるが、モンゴリヤは沙漠のやうなところである。野生の馬が多くて、この種族は乗馬を好む。子供でも女でも、みんな馬に乗る。しかもそれは多く裸馬だから、跨げば馬の腹をしつかり足で締めなければならぬ。そこでだん〴〵足が曲つた。よく西洋でいふ、日本人の足はポーレゲットで、弓形をしてゐる。膝と膝が空いて、



西洋人のやうにすんなりしてはゐない。また暮しやうとか、習慣といふやうなものから、身體に異常を來すことはあり得るし、足を短くすることもあるであらう。

また食物が、身體の發育に至大の關係を持つといふことは、すでに萬人の認めるところで、今更述べる必要はない。さらばといつて、これが人體の構造にどういふ結果を現すかといふ具體的の調べは、今だに十分ではない。影響するには違ひないが、どういふ食物が、どういふところに、いかにして影響するかといふ局部的の試験は、まだ出來てゐない。けれども、それとて追々判明するであらう。それから同じ食物を攝つてゐても、手足をよく使ふかはぬかによつて、相違の起ることもまた當然である。現に、日本の女學生が、過去十五年ばかりの間に伸びた脊の高さは、かれこれ平均一寸以上に達してゐるさうである。

男子は、以前から飛んだり跳ねたりして、足を十分に使つてゐたから、その變化も甚だしくはないが、女子の生活は、なか／＼そんな吞氣なものではなかつた。家に歸れば、チャンと坐つて、一にもお行儀、二にもお行儀で、固苦しく育つて來た。近頃は、それががらりと變つて、運動熱は盛んになる、生活は快活になる。隨つて行儀作法といふやうなものにも、多少變化が生じて來た。飛んだり跳ねたりして、足は十分使ふといふわけであるから、これが身體上に著しく影響を及ぼしたことは當然である。

それからもう一つの例は、前に述べた如く、東北人が身體の發育上、一つの特徴を持つてゐるといふことである。詰り、足が短いといふことである。何故、足が短いかといへば、雪と寒さの關係である、といふ外に理由はあるまい。先づ雪でも降ると、炬燵の中へ尻を突込んで、一日寝ころんで過すことがよくある。スキーでも盛んにやつたり、スケートイングが流行るやうになれば、かういふ習慣もだん／＼變つて來るであらう。も一つは、東北は文化のプリミチーブなところである。隨つてその邊では、中流以上の相當な家庭においても、生れた子供は、いつこといふ笹のやうな籠の中に入れ、甚だしいところでは、終日その儘に放



つておくのである。しかも足を包み、腰を包んで、子供が自由に身動きもならぬやうな、無茶苦茶なことをされて育つのである。こんなことを仔細に考へると、氣候の關係なり、風俗習慣の相異によつて、人體に影響を及ぼすといふことは、確に否むべからざることであらうと考へられる。

### 濕氣を呼ぶ栖鳳氏の畫

同じ西洋でも、英吉利は雨が多い。これに反して亞米利加は雨が大へん少い。或人の説によると、亞米利加人のエネルギーの盛んなのは、雨のあまり降らないお陰である。随つて空氣中にオゾンが多い。空氣中にオゾンがあると、すぐ人間は、ブルブルするやうに感じて、頭がカラツと明瞭になり、神經を刺戟されて黙つてをれない。亞米利加人のエネルギーは、まつたくオゾンの賜物である。同じ人種ではあるが、英吉利は空氣中にオゾンが乏

しいから、英吉利人にはのろつとしたところがある。西洋と一口にいつても、この點においては、英吉利と亞米利加は大へん違ふやうである。

たゞオゾンの含蓄量はかりではない。亞米利加のやうに空氣の乾いてゐる所では、あまり物が明かに見えて、却つて人間の心の作用のサゼツションといふことが少くなる。空氣のもやつとした所では、物の輪郭が明かでない。たゞに輪郭ばかりではなく、すべて物の形が明かでないから、イマーヂネーションといふか、あれはかうではなからうか、といふやうな氣分を養ふことが出来る。亞米利加のやうな所では、例へば一つのコツプがあるとすると、それが非常に明かに見える。かうくゝいふ形でかうだといふ工合で、サゼツションも何も要りはしない。誰が見てもコツプはコツプで、コツプの大きな物は大きな物なりに、その形がちやんとわかる。それが大氣のぼんやりした所であると、同じコツプでも、どうもコツプには違ひないが、あの丸味はどんなものだらう？……どうも下の方の部分がはつきりしない、



といふやうな事になつて来る。

随つて風景などにおいては、殊にこのサゼツションといふことが大事になつて来るので、空氣の透明なはつきりしてゐる所では、偉い美術家が出ないといふことである。何故かといへば、山の景色を見やうが、樹木の姿を見やうが、山の平面的なところなり、その尖つたところが明かに見える。木を見ても、その葉が鮮明に一枚々々分立して見える。これに反して、空氣の朦朧とした所では、どことなく物の姿にぼやつとしたところがある。随つて美術家自身に、大いにサゼツションとイマーゼーションを用ひる餘地が生ずるのである。

もちろん風景の方の、所謂ランドスケープ・ペインティングの方には、さういふことがあり得るとしても、ポートレート・ペインティングにさういふイマーゼーションを用ひてはならない。もし肖像畫の方に、あの人の鼻の格好をちよつと高くしてやらうとか、或は低くしてやらうと、畫家の想像でやられると、ポートレート・ペインティングの趣旨に外れる。肖像畫

などは、却つて空氣の明かな所がよいと思ふ。

とにかく風景については、今述べたやうなことが確實ではなからうか。現に竹内栖鳳といふ人は、日本には二百年この方あれくらゐな畫家はあるまいといふ評判の人であるが、栖鳳氏の描く畫を見ると、一番得意としてゐる畫は、いつでも濕つぽい氣分の現れた作品である。佛蘭西のリユクサンブルの美術館で、何萬圓とか出して買ったといふ栖鳳氏の畫は、支那の杭州か何處かの「雨の降る日」といふ、黒い雲がかゝつてゐて、雨がしと／＼降つてゐる畫である。私の知人に、大阪の財産家で實業家がある。この人は相當に美術なども詳しくやうであるが、この人が私にいふに、

「自分は栖鳳氏の畫を床の間にかけてゐる。大きな幅で、矢張り梅雨か何かの雨の降つてゐる田舎の景色である。ところが不思議なことに、あの畫を床の間にかけておくと、どうも濕氣が部屋に溜る。何だか、あの畫が濕氣を呼ぶやうな氣がする。私ばかりではない。下女な



どが居間を拭いたり、掃除をしに行くと、あの掛物のかゝつてゐる時には、實際濕つぽいといつてゐる。』

と眞面目になつていつてゐた。大へん面白い話だと思ふ。

かの亞米利加人のお札博士といはれた人の書いた物を見ると、その中の一節に、富士はいつも綺麗である。が曇つた日は一層綺麗だ。そして、雨の日の富士は、その最たるものである。かういふことをいつてゐるが、恐らく、これは一言にして、日本の氣候と日本の美術關係の印象を盡した言葉であると思ふ。

### 東西共通的の要素

次に、音楽であるが、かつて私は獨逸で有名な音楽家に會つたことがある。その時に、各國の音楽の話をしてくれた。その中に、島國には、どうも宜い音楽が生れないといふ言葉が

あつた。當時私は學生であつたけれども、どうも不思議なことを聞くものだ、深く頭の中に残つた。

その時に私は、島といへばすぐ英吉利が連想されたから、英吉利には音楽家で偉い人はありませぬかと問ふと、然り、英吉利には古來名音楽家は出ませぬと答へた。そして、三十餘年前に、英吉利に相當聞えた音楽家があつたが、あれは英吉利人でなく、たゞ英吉利に國籍を移したゞけで、生れは獨逸人であるとのことだつた。その他二三有名な英吉利の音楽家について聞いて見ると、みんな伊太利人だつたり、或は佛蘭西人だつたりしたので、私は島國にはよい音楽は起らないものだと思ふやうになつた。

かういふ點から考へて、音楽などいふものは、殆んど民族的に、種族的に、はたまた人種的に差別のあるものであつて、世界人類誰人にも共通したものでないやうに思ふ人もある。しかし決してさうでなく、どこか根本において共通點があるのではなからうか。島國だ



からどうだとか、その國の空氣がかうだからといふのでは、どうも解き難い共通の點があるやうに思はれる。日本に音樂がないといふことも、信するに足らない議論かと思ふ。

明治八九年頃、紐育ヘラルドのハウスといふ人が、政府の顧問として、また大學の文學を講義するために日本に来てゐた。大へん日本好きな、身體の弱い人で、太平洋の行通ひが億劫だといふので、ずつと日本に住み、四谷の近所に家を持つてゐた。この人は早くから、日本人には音樂の素養があるといつて、同國の亞米利加人やその他の外國人から始終笑ひものにされてゐた。けれどもハウス氏は、いや、日本人にもボイスがある。たゞそれを練習しないからだといふので、音樂好きな人であつたから、若い男女を集めて、自分の家で頻りに養成してゐた。すると、矢張り相當に聲が出るやうになつたので、それ見たことかとはかりに、日本人に音樂がないといふことは決してない、と自ら誇つてゐた。私の考へでは、日本人にも西洋の音樂をよく理解し得るといふことを、實際に證據立てたのは、恐らくハウス氏

が初めてであらうと思ふ。その後は、音樂學校なども出來、近頃は日本人でプリマドンナなどゝいつて、歐羅巴の樂堂で西洋人を驚かしてゐる男女もたくさんあるのである。

要するに、氣候によつて心理的及び生理的、解剖學的に、それ／＼差が起つて來る。まして東西相距るところにおいては、その差もまた著しくなるものであるが、それと同時に、吾々は身體においても、心理においても、藝術においても、或は哲學、宗教、若くは文學、思想上においても、殆んど東西といふ差別を超越した、共通的な要素があるといふことを知らなければならぬ。

日本人はあくまで日本人だ、日本人には西洋人のことはわからないとか、同様に西洋人もまた日本人のことはわからぬ、といふやうな議論をし／＼聞くけれども、西洋人も人ならば、日本人も人である。人としての共通點があり得るならば、東西の差異を論ずると同時に、またその共通點をも大いに記憶してゐなければならぬと思ふのである。



## 西も東も文字の先祖は一つ

近頃、よく日本人の中に、國粹を説くものがあつて、自分勝手な説を述べる時には、何でも日本主義であるといひ、これに叛けば愛國心がないとか、日本人でないとかいつて、とかく日本といふ言葉が濫用されてゐるやうである。

昔、猶太人が、何か自分勝手なことをする時には、神の名によつてとか、神がかう告げたとかいふ悪い癖があつた。諸君も御承知の、舊約全書にあるモーゼの十誡の中には、『汝の神の名を紊りに用ゆることなかれ——』

といつてある。甚だしきは神といふ字、發音すら許さなかつた。舊約全書にはエホバとか、ヤーベなどいふ字が書いてあるが、あれも實は神といふ字ではなく、神といふ言葉は外にあるのださうである。あまりに勝手に神といふ字を濫用したからであらう。その意味で

現在日本といふ言葉も、やゝ濫用されてゐる傾きがある。

先日、或場所で、或男が頻りにキリスト教の攻撃をしてゐた。何でも、日本の現今の悪いことのすべては、西洋から來てゐる、明治維新までは、決してかゝることはなかつたなどいつて、妙な例を擧げて得々とやつてゐる。どんな顔をしてゐるか、どんな装をした男かと思ふと、洋服を着て、頭髮などハイカラにしてゐる。しかも議論の折々には英語などを交へて、得意な表情である。ずゑん矛盾してゐるではないか。お互はさういふ不謹慎はいひたくない。もう少し眞面目に研究し、日本の長所はあくまでも擴張するが、短所と思はれるところは、どしどし外國の長を採つて補ふやうに心がけたい。これは明治の初の方針でもある。殊にだん／＼深く研究すれば、西洋々々といつて他人扱ひしてゐたものが、いづくんぞ知らん、祖先を共にしてゐたといふやうな事實もあるのである。

大體、日本には從來文字はなかつたらしい。日本の文字は、いふまでもなく支那から來た



ものである。日本で造つたといふ片假名でも、平假名でも、その本は支那の漢字を略したものであつて、根本は支那であることに間違はない。然らば、その支那文字なるものは、何處から来たか？ これはなかくむづかしい問題で、また的確にわかつてゐないやうであるが、支那の文字はアツシリヤのキユニホームから来たといはれてゐる。それは紙のない時分であるから、泥の上に書いた。泥を固めてその上に何事かを書いたものである。泥を固めたものであるから、刻るには釘のやうなもので書いたのであらう、字は楔形になつてゐる。英語ではキユニホームといつてゐる。楔形文字から起つたものであらうといつてゐる。アツシリヤ語でなければ、むしろそれ以前の、スメリヤのものではなからうかといふ説もある。とにかく支那で起つたものではなさうである。

それでは、西洋の文字は何處から起つたか？ これは大體において希臘から来たものといへるであらう。その希臘の文字はどこから来たかといへば、カルデヤから来た。然らばカル

デヤの文字は、何處から来たかといへば、これまたスメリヤかアツシリヤか、それに近い所から起つたものであつて、かうして文字の起りも、その先祖を糺せば、共通の所に落つくやうである。

小亞細亞地方を、佛蘭西の地理學者ビダールは、ノーダル・ポイントと稱してゐる。ノーダルといふのは、英語でも佛蘭西語でもノードといひ、竹の節の部分である。一方から一方へ合せたところをいふ。詰り、東西の合せ目に節がある。これが小亞細亞からメソポタミヤにかけて一帯で、節にしては随分廣い節であるが、先づあの邊らしいといふ。またかういふ説もある。文字は矢張りメソポタミヤ附近、即ちバイブルにあるエデンの花園の邊から起つたものではないかといふ。それがためにエデンの東と、エデンの西によつて、字の書く方向が違ふ。エデンの右を東、左を西とする。東の方ではどういふ恰好に字を書くか、といへば、右から左へ書く。或は縦に真直ぐに書下す。西の方、即ち歐羅巴の方ではどうするかといへ



ば、いふまでもなく、左から右へ書綴る。どうしてこんなに反対になつたかといふと、エデンの園が慕はしいからだといふ。アダムとイヴが園を出されて、再び入らうと努めたけれども、エデンの花園の門前には、燃ゆる火の刀を持つた天の使が守つてゐて、誰も中へ入ることが出来ない。しかし、入りたくて仕方がない。これが即ち文字の氣分に現れたといふのである。何でもエデンの方へ、エデンの方へと心が馳る、それで文字も左から右へといふやうになつた、といふのであるが、眞實のほどは勿論わからない。

### 文字の國支那

とにかく、單に文字だけについて考へても、東西の差といふものは、その源において大して變つてゐると思はれない。もつとも、その發達の仕方はその後だん／＼變化して、現在の如きものになつたのであるが、元は單純であつただけに、極く類似した生立ちを持つて

ゐるのである。従來日本人は、自分の國を稱ぶに言葉の國といつてゐた。これは支那に對していつたことで、支那は昔から文字の國といはれてゐる。それほど文字を尊ぶ國民である。即ち文字をもつて一つの美術と見る。だから勢ひ目で見ると方に重きをおいて、字の意味は解らなくても、字さへ美しければよいといふところまで行きかゝつてゐる。これは、一面には書道が墮落したともいへるであらう。

私は日露戦争の直後滿洲へ行つた。當時滿洲の總督は張作霖の前の趙爾巽といふ人で、彼から招かれて滿洲の農業政策を定めるために出張したのである。當時は私も、農業のことは少しばかり知つてゐたので、一月ばかりそこに止つて、何かと相談に與つたのであるが、その頃交際したいろ／＼の高官連が、たくさん私に書いたものをくれた。非常に綺麗な字である。しかし、この書には一體何と書いてあるのか一度読んで説明して貰ひたいといつても、誰も説明する人は少い。これには私も驚いた。たゞ綺麗な字といふだけである。



かうして文字を美術化したといふのは、これは西洋にはないことであつて、東洋獨得のことらしい。故に、文字を見て、眞に美しいといふ味ひは、西洋人にはどうしてもわからないやうである。

例へば支那の町々に掲げてある、各家々の立看板や廣告等を見ても、西洋人がこれを見る時には、いかに雄筆なものでも、美的だとは考へないやうである。何だか黒々しい字がたたくさん並べてあつて、却つて不愉快を感じるといふ場合である。時々これをみて、眞に美的な文字だといふ人もあるが、それはよほど東洋の美術に注意を寄せた人であつて、意味はわからなくても、精神的に物を見るやうな人には、何だか異様な感じを與へるのである。或點からは、誰かもいつたやうに、東洋の文字には、一言でバツと意味を盡してゐるものがたたくさんある。速記文字のやうなもので、音で綴るのではなく、字の形でわかるのだから、これほど便利なものはないに違ひない。

### 東西に根本的の差なし

とまれ、何事についても、東洋はかうだ、西洋はかうだといふやうに、カツキリ兩者を區別することは出来ない。人情なり、歴史なりといふものは、どこでも大概似たものである。どこからどういふやうに起つたかと源に遡つたならば、恐らく矢張り印度とか支那とか、そんな所で結びつけられてゐるのではないだらうか。

佛敎のことを聞いてもさうである。かつて私は伯林の人類學の博物館に行つたことがある。そこにミユラーといふ人がゐた。この人は東洋部を監督してゐた人であるが、日本のことなどは實に詳しく研究してゐる。昔の日本の文字などでも、私にはとても讀めないやうな、奈良時代の原稿でも何でも、すらく讀みこなして、頗る日本の事情に精通してゐた。この人の案内で、博物館を見た時に、お釋迦さんの首がずらりと六十ばかり並んでゐる。ま



づミユラー氏が、一番初めの佛の頭を指して、これは何處の製作だかわかりますかといふ。私は美術のことなどよく分らないけれども、確かに希臘の彫刻だと思はれるから、さう答へると、その通りだといふ。一目で誰でもわかるほど、鼻の恰好でも希臘型をしてゐる。その次はどうだといふ。見ればそれも前のと似てゐる。その次は……、それも前と同じやうだ。四番目は、五番目は……と見る中に、だん／＼下手になつて行く。けれども希臘型ではあるらしい。そこで次第に見過して、六十番の一番終ひになつて、これはどうだといふ。恐ろしく下手な物で、日本には田舎の石屋などが地藏尊を刻んだのにこんながある、といふと、まつたくその通りだといふ。

それから、彼が説き初めたところによると、ガンダラ或はバツトリヤに、アレキサンドルの時代に希臘から入つて行つた美術彫刻家が、釋迦牟尼の像を刻んだ。やがてアレキサンドルの勢力が薄らいで、希臘の美術もやうやくバツトリヤで衰へた。それが年代を追ふて、だ

ん／＼下落して行つた傾向がある。即ち二十年三十年毎に、順に年を逐ふて墮落し、遂には日本の片田舎などに散見する、拙ない石屋の造つた藝術と選ぶところのないまでになり下つてしまつた。かやうにして希臘の彫刻や美術が、印度に渡り、支那に渡つて、だん／＼衰へてしまつたが、最後に日本に渡つて——西藏にも渡つたのであるが——とにかく今日まで希臘の美的觀念を、そのまゝではないけれども系統的に保存してゐるのは、日本と西藏だけであるといふ。

現に、鎌倉の長谷の大佛などを見て、確にこれは希臘式だといふ西洋人がある。奈良の大佛は、途中で改造したから、大分顔なども變つてゐるし、行つて見ても、いかにも希臘式とは受取れず、さうかといつて、また純然たる日本式のものでもないやうに思はれる。私にはよくわからぬけれども、現今の奈良の大佛には美術としての價値は發見されない。とにかく吾々日本人がこれほどに誇つてゐる美術においてすらも、どこかで西洋の美術と繋がつてゐる



るところがあるやうに察せられる。

何故かならば、日本古來の美術といふものは、殆んど全く佛教の賜物である。しかもその佛教の美術は、確に當時の波斯から受け繼がれたものであり、更にまた波斯の美術は、往時の歴史の示す如く、一再ならず希臘から影響を受けたといふことは、否むことの出来ないことであつて、かやうに觀きたれば、その源を一にしてゐるといふことは、殆んど疑ふことのできない事實であると思ふ。

要するに、私の主張するところの決論は、東西の差といふものは、決して根本的のものではない。彼の福澤先生は「西洋事情」を書かれて、日本人の西洋に對する觀念に一大改革を興へた。私は福澤先生の眞似をするわけではないが、また實際それは及びもつかないことであるが、たゞ西洋の事情が、今日大分日本人に誤解されてゐると思ふ。そこで、西洋の事情といふものは、かうしたものである。西洋人の考へといふものは大體かういふものである

と、むしろ精神的方面の事情を述べて、その日本人の共鳴せざるべからざる點、そこに重きをおいて述べたのである。

### 世界人としての日本人の覺悟

明治天皇の吾々國民に賜りたる最大の賜物は何かといへば、吾々が單に臣民としてばかりではなく、國民として、公民として、はたまた市民としてあつて欲しいといふことである。殊に、普選の行はれるやうになつた今日においては、いよく吾々はサブジェクティブばかりであつてはならない。シテイズンといふ、一國の市民、公民、國民といふものになるためには、たゞサブジェクトといふ土臺ばかりでは、人間はまだ完成しないと思ふ。今までの教育は、臣民とか或一國土の國民とかいふ土臺の定つた、一定した範圍の中の教育であつたら、その結果は、近頃のやうな所謂危險思想が行はれるやうになつたのである。何故もつと



廣いベースに、廣い土臺の上に、教育をおかなかつたか。臣民よりも廣い、國民よりも廣い、人間といひ人格といふところに、その根本をおかなかつたか。

愛國といへばその國を對象物としてをり、忠君といへばその君を對象物としてゐる。さういふ單なる對象物でなく、もつとアブソルートな、誰の關係といふことでなしに、獨立獨歩した、天上天下我れ一人のパーソンである、外には何も對象物のない、俺は一個の人間だといふ考へを常に養つて置かなかつたので、日本人の修養の基礎は甚だ狭いものとなつたのである。この狭い基礎の上に立つて、忠良なる臣民、愛國者のみを造らうとしたから、却つて逆な結果を招來して、今日の危険思想を持來したのである。危険思想などといふものは、今までの狭い教育の論理的歸結として、誘致されたものではあるまいかと思ふ。

人間といふ教育を授けてゐる國においては、平生は随分勝手な、妙なことをいふやうに思はれるが、それにも拘らず、國の君に對して不敬を働くとか、或は反感を抱くといふことが

ない。英吉利などはその最もよい例であらうと思ふ。亞米利加でも、すゐぶん大統領で暗殺されたものもあるが、それにしても日本のやうな危険思想はない。あれほどたくさん外國人が集り、歐羅巴の槽見たいな異分子が入つて來て、亞米利加自身に對し反感を抱くやうなものが多くありさうに思はれるが、決してさうでない。經濟上亞米利加が裕福だからだといふだけでは、この問題は解けまいと思ふ。これらの國においては、一般の考へなり、殊に教育制度が、今いつたやうに偏してゐない。狭い土臺の上に立つてゐないからである。

これに反して、我國においては、偉い立派な愛國者だとか、或は忠臣といつたものが出るにしても、土臺の狭い上に立つては、いくら高くしようと思つても、さう高い所までは行けるものでない。或一部に、特別に高く行つた人があるとしても、土臺が狭ければ、一朝地震でもやつて來れば、忽ち倒れてしまふのである。もつと廣いベースに、人間といふ廣い見地に、人格といふ高いところに、その目標を定めなければ、日本の將來といふものはいかに



なるであらうか？……これが、いつも私の脳裏を離れないのである。

東西の合致点なり、或はその差異を見ても、單に、我は日本人なりといふばかりではなく、我は一個の人間である、もちろん日本自身のことに関しては日本人であるけれども、同時に、世界共通の人類の一員であるといふ立場から、これらの問題を研究すれば、いさゝかの偏見もなく、どういふところで融和が出来るか、また、どういふところが融和出来ないか、そしてその場合には、いかにして日本の思想を向うに傳へることが出来るか、また彼方の長所をいかにして採ることが出来るか、といふことも、冷静に且つ客觀的に、よくわかるはずであると思ふ。

願くば、私が述べた諸點についても、所謂今日世の中で流行る狭い論據から離れて、もつと廣い／＼立場から研究していただきたいと思ふ。福澤先生が「西洋事情」を書かれた時まさうであつた。日本のためにはあくまでも盡したいといふ意志があると同時に、何でも日本

のことなら主張しよう、西洋のことなら頭から駭さう、といふ考へは毛頭持たれなかつた。そこに「西洋事情」なるものが、我が國民の教育に與つて偉大なる力のあつた理由が存するのである。



西洋の事情と思想 (終)

不許複製

昭和八年十二月廿五日印刷  
昭和九年一月五日發行

西洋の事情と思想  
(付 眞)

定價壹圓貳拾錢

812.27

著者	新渡戸 稻造
發行者	增田 義一 東京市京橋區銀座西一丁目三番地
印刷者	稻垣 武雄 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所	英舍 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
發行所	實業之日本社 東京市京橋區銀座西一丁目三番地 電話番號東京(五六)五一二一 銀座口座東京三二六番



# 偉人群像

版一十 定價壹圓五拾錢  
送料拾貳錢函入

偉大なる學識と、卓越せる見識を以て、名聲噴々たる著者が、國際聯盟事務次長の輝ける地位にある間、東西世界各方面の偉人傑士と親しく談論したる當時を顧み、その人物、性格、功業、思想及び言論等を本書に於て論評したるもの。全篇ながら巨人名士の群像論評にして、偉人傑士と卓を圍んで談するの欣快は、本書によつて始めて望み得られよう。

翻譯成り世界的な好評を増す

新渡戸 農 國 聯 法 盟 稻

目 概 容 内

偉人の解	.....
英國政界の奇才	.....
保守黨の外交家	.....
セシル卿の生ひ立ち	.....
文豪ウエルズ氏と會見	.....
音楽報國	.....
ナンゼン博士と語る	.....
女性の非難論	.....
智囊ハウス大佐	.....
學徒の模範	.....
伊藤公、桂公、見玉伯、乃木伯、後藤伯等他拾餘項	.....

行發社本日之業實

學前 博 士 長 著 生 先 造

東西文明の大架橋茲に成る

本書は學識卓越せる人格者新渡戸博士が、我國民の使命と國情とに痛感して著はされしもの。内容は頗る多方面に渉り、滋味全篇に横溢す。修養と興味とを兼ねたる隨思隨想録にして、實に天下一品である。政治家、實業家は勿論、學者も官吏も一般青年指導者並に、青年諸君の熟讀を望む。一讀浪々として胸中に往來するものは何ぞ、透徹せる世界的觀察眼と次代日本の基礎を建設せんとする奮勃たる希望と抱負とである。

目 概 容 内

世界はいま何時か	.....
大國と小國	.....
亡國の悲哀	.....
北方の人	.....
蘇蘭土人の特性	.....
カーライルに負ふもの	.....
昔ながらに残る衆議政體	.....
勤勉と節約の國	.....
瑞西の高官	.....
雄辯と人格の人	.....
內的に見た輿論	.....
怪我の功名	.....
其の他	.....

行發社本日之業實

# 東西相觸れて

版七十 定價貳圓中型  
郵稅拾錢函入



法 農  
造 稻 戶 渡 新

縮 刷 修 養

識古今に互り徳一代に冠たる博士が、五十餘年の學問と經驗を傾け、滿腔の熱血を注ぎ、品性、人格、處世法に互りて説きせられたるもの其説明の親切なる、其材料の豊富にして興味深き、滾々として盡きざる天泉に比すべし。

目 略 容 内

總説——青年の特性——青年の立志——職業の選擇——決心の繼續——勇氣の修養——克己の工夫——名譽に對する心懸——貯蓄——余の實驗せる讀書法——逆境にある時の心得——順境にある時の心得——世渡りの標準——道——默思——暑中の修養——暑中休暇後の修養——各項詳細に述ぶ

版七十四百 定價壹圓五拾錢 郵 稅 八 錢 總布裝美本函入

縮 刷 世 渡 り の 道

高遠の理想を抱き、人格を高くし、品性を潔くし、俗にあつて俗に穢れざる眞の世渡りの道を説く。

目 略 容 内

總説……快活なる世渡り……世は情……怒氣抑制法……他人の言行に對する批判……人に對する禮節……應對談話……人嫌ひの矯正……奮闘の心得……鬼ヶ島征伐……團體的道德……頭の振り方……惜まれる人……嘘の矯正……惡口……泣言の矯正……廉恥心……親切の修養……其他

版三十九 定價壹圓五拾錢 郵 稅 六 錢 總布裝函入

行發社本日之業實

士 博 學  
著 名 大 四 生 先

自 警 錄

道を修める上に、最も意を注ぐべきは、平生の精神の持ち方心の態度である。本書は修養界の第一人者たる博士が、日々の心得、尋常平生の自戒を綴りて、自らをも警しめ、一般の人々の修養の資にも供せられたものである。

目 略 容 内

男一正——一人前の人と一人前の仕事——強き人——外は柔——内は剛——心の強くなる工夫——怖氣の矯正——世に蔓こる者は憎まる——人生の成敗——人生の決勝點——人生表裏の判断——廣く世を渉る心掛——理想の實現は何處——全力餘裕——若返りの工夫——進上を替しむ——富と貴の精神化——其他數十項目にわたり詳述

版六十 定價壹圓五拾錢 送 料 八 錢 函 入 美 本

一 日 一 言

博士が世の爲、人の爲、精神的食料を供せんが爲に、一年三百六十五日に宛てはめ、修養に關する博士の感想を記し、尙東西古今の金言道歌を挾む。文章簡明にして而も流麗、博士の胸底より迸る誠意と同情とは全巻に溢る。一日讀めば一日の善を學び、二日讀めば二日の啓發を受けん。苟くも意義ある生活を學ばんとする人は必ず本書を携帶せられよ。

版五十九 定價壹圓貳拾錢 郵 稅 四 錢 總 夕 口 一 製

行發社本日之業實



# 内観外望

七版 定價壹圓五拾錢  
送料拾錢函入

異郷に客死せる著者が日本の進むべき大道を指示す

日本が生める隨一の世界的國際人として、その一言一行は國際的反響を喚起する著者が、日本及び世界が經濟的に思想的に大患に悩まされつゝある現狀に深く心を痛め、これが依つて來る原因を究め、現狀を洞察し大觀し、卓拔せる識見と該博なる學識を以て、祖國愛の熱情より本書を公にせるもの、非常時日本の讀書階級に贈れる名著である。

## 目 次

新自由主義	………
マルクス運動の我國に容れられぬ理由	………
東西王道の比較	………
國際政治と國內政治	………
武士道と商人道	………
都會病	………
英語と英文學の價值	………
米國人の英語とその文學	………
大學教育の使命	………
大學教育と職業教育	………
現代思想と印度	………

行發社本日之業實

農・法學博士  
新渡戸稻造氏著

# 大國民の根柢

八十版 定價壹圓八拾錢  
送料八錢・中型

大國民たるべき大常識の修養を述べ、人格涵養の要義を論じ、島國根柢の弊害を論じ、偏狹固陋なる頑冥思想より脱して眞に世界を友とし、全人類に活眼を注げる大國民的品性の修養を力説す。國民大衆の絶好の教養を兼ねたる修養書である。

實業之日本社長々  
增田義一氏著

改訂増補 青年と修養	新時代の青年の正しき修養の實踐的修養書	九十七版	壹圓五拾錢	送料拾錢
思想善導の基準	本書により善導の基準確立	二五版	壹圓五拾錢	送料八錢
運命の打開	運命打開の方法を實例によつて説く	七版	定價壹圓	送料拾錢
處世新道	新時代の新處世法を、懇説せる名著	七版	壹圓五拾錢	送料拾錢
青年出世訓	日本のマーデンの稱ある著者の出世訓	一六版	定價貳圓	送料拾貳錢
立身の基礎	東洋のスマイルスの稱ある著者の修養書	三五版	貳圓貳拾錢	送料拾貳錢
婦人と修養	女性の煩悶や身上相談を解決する家庭修養讀本	一四版	壹圓五拾錢	送料拾錢
現代名士奇聞録 茶前茶後	名士の奇聞をユーモア的に點描す	八版	定價壹圓	送料四錢

實業之日本社發行



帝國教育會々長  
鎌山 榮吉氏監  
帝國在郷軍人會會長  
鈴木莊六大將

# 日本精神作興

歴史  
讀本

神武  
維新  
建國  
日記  
各一冊  
送圓貳拾錢

海軍中將・子爵  
小笠原長生氏註

# 愛國讀本

東郷  
元帥

沈黙の聖雄が、愛國の  
至誠、純忠の熱血より  
國式に向つて物語る書  
(定價壹圓送料拾錢)

海軍中將・子爵

小笠原長生氏著

# 偉人天才を語る

書簡  
點描

東郷元帥乃木將軍を初  
め、常陸山關等の天才豪  
傑廿有餘人の人物論評  
(壹圓五拾錢送料拾錢)

實業之日本前主筆  
都倉 瓊川氏著

# 拔群の人々

奮闘  
活歴

吾人の以つて範とすべ  
き實業人十七士の奮闘  
的評傳を集成せる力著  
(壹圓貳拾錢送料拾錢)

日本思想研究會幹事  
森 清 人氏著

# 人間松岡の全貌

帝國外交を轉換せしめ  
たる鐵血全權を語る。め  
全權の眞面目權如たり  
(壹圓貳拾錢送料拾錢)

日米新聞前主筆  
四至本八郎氏著

# 頭腦トラスト

ルーズベルト大統領の  
新經濟復興政策の立案  
とその經過を懇説す  
(壹圓貳拾錢送料拾錢)

實業之日本發行



660  
12



